聖隷クリストファー大学

保健福祉実践開発研究センター
年　報

地域貢献事業研究 報告書

第４号
（2012）

聖隷クリストファー大学
保健福祉実践開発研究センター

ごあいさつ

聖隷クリストファー大学保健福祉実践開発研究センター年報第 4 号（2012）の刊行にあたり、ご挨拶させていただきます。

当センターの活動は、2013 年度の現在 5 年目に入っており、当年報では 2012 年度の実績を報告しております。

2012 年度から、地域の実践現場とともに共同で行う「研究」に重点を置き、その研究成果を地域へ還元することを目的に、「地域貢献事業研究費」と名称を改めて取り組んだ 2012 年度の地域貢献研究事業費の採択数は 6 件でした。募集時に対象となる研究事業の考え方と配分総額、および審査基準を従来よりも明確にしたことでレベルの高い内容の事業研究と適切な配分ができたと考えております。この 6 件の研究事業の報告書は当年報に掲載しております。また、報告会は例年 11 月に行われます聖灯祭・ホームカミングデー同日にポスター形式で行っており、地域の皆様や卒業生にご覧いただいています。今後とも、研究成果や教員の地域貢献活動の情報を積極的に発信してまいりたいと考えています。

公開講座につきましては、時勢やニーズに合ったテーマ設定をし、テーマに応じた適切な集客目標を立てて 2012 年度は専門職向けの公開セミナーを 2 回、市民公開講座を 2 回実施しました。テーマに沿って高名な講師をお招きし、いずれも目標を超える受講者数の集客ができ、受講者の満足度も高い結果が得られました。今後も引き続き、専門職向け、市民向けともに皆様のニーズに応えられる講座を開催していきます。

地域の専門団体や施設、行政から当センターへの講師や委員の派遣依頼は年々増加しており、地域で果たす本学の役割を拡大することにつながり、大変喜ばしいことと感じています。これからも保健福祉実践開発研究センターが地域の皆様から必要とされ、“地域と歩む”実践を続けてまいる所存です。みなさまのご支援ご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

2013 年 11 月

聖隷クリストファー大学
保健福祉実践開発研究センター
センター長　小島　千枝子

目　　次

Ⅰ．2012 年度事業報告

1.　地域貢献事業研究課題一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

2.　公開講座　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3

3.　研修会講師等派遣　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　9

4.　保健医療福祉団体の委員等派遣　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　14

5.　研究支援　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　15

6.　資　料　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　16

Ⅱ．2012 年度地域貢献事業研究　報告書　・・・・・・・・・・・・・・・・・　29

保健福祉実践開発研究センター運営会議　委員一覧　・・・・・・・・・・・・・・　51

1．　地域貢献事業研究　課題一覧

当センターでは、本学周辺地域の保健医療福祉分野に貢献する研究事業を対象として『地域貢献研究事業費』を配分しています。2012 年度より「地域貢献研究事業費」から「地域貢献事業研究費」と名称を改め、区分を 2 種類設けて公募をしたところ計 8 件（区分 A:5 件、区分 B:3 件）、計 4,349,862 円の申請があり、保健福祉実践開発研究センターによる審査の結果、6 件の課題を採択し、計 1,937,335 円の研究事業費を配分しました。

研究課題 6 件の報告書を当年報（P.29～）に掲載しておりますので、併せてご覧ください。

（区分）

A：本学周辺地域の保健医療福祉の向上を目的とし、地域の保健医療福祉の実践現場と共同で行う研究

B：本学周辺地域の保健医療福祉の向上を目的とし、地域との基盤作りとしての事業に関する共同研究

所属	研究代表者	職位	区分	研究課題	対象地域	配分額
看護※	岩清水伴美	助教	A	掛川市における保健師の現任教育システムの構築	掛川市	316,638
リハ OT	鈴木達也	助教	A	出張型陶芸クラブの効果に関する探索的研究	浜松市	234,355
リハ ST	池田泰子	助教※	A	言語聴覚士は療育園の療育においてどのような役割を担えるか　～療育園指導員が在籍児に言語検査を実施する支援を通して～	浜松市	202,095
リハ PT	大町かおり	教授	B	就労支援事業としての水耕栽培の導入および効果に関する調査研究	浜松市、袋井市	289,442
リハ PT	金原一宏	助教	B	地域在住高齢者を支えるリハビリサポート体制の構築	浜松市北区	423,005
リハ OT	建木　健	助教	B	高齢者の居場所づくりによる街中にぎわい計画　－世代を超えた絆づくり－	浜松市（田町商店街）	471,800
					合計	1,937,335

※看護＝看護学部、リハ＝リハビリテーション学部、PT＝理学療法学科、OT＝作業療法学科、ST＝言語聴覚学科。所属、職位は 2012 年度当時。

＜地域貢献研究事業　報告会＞

2011 年度に地域貢献研究事業費の配分を受け実施された研究事業の報告会を下記日程で開催しました。

日時：2012 年 11 月 3 日（土）10：00～15：00　※聖灯祭・ホームカミングデーと同日

場所：聖隷クリストファー大学 1 号館 4 階　1401 教室

発表：ポスター発表

来場者数：159 名

地域貢献事業研究費　2012年度募集要項

保健福祉実践開発研究センター「地域貢献事業研究費」について、下記の要領で研究計画を募集します。

1. 基本方針

保健福祉実践開発研究センターの柱のひとつである「保健医療福祉分野に係るすべての人たちとの共同事業・研究」を推進し、共同で課題解決を図るために、本学周辺地域の保健医療福祉分野に貢献する研究を対象とした事業研究費を募集します。

2. 対象となる研究および事業研究費の金額

Ａ：本学周辺地域の保健医療福祉の向上を目的とし、地域の保健医療福祉の実践現場と共同で行う研究
Ｂ：本学周辺地域の保健医療福祉の向上を目的とし、地域との基盤作りとしての事業に関する共同研究

・実習先・就職先施設等と連携した研究であればなお望ましい。
・事業研究費の配分総額は130万円の予定です。
（2012年度予算決定をもって確定しますので、変わる可能性があります）
・配分対象の経費および単価基準は、「共同研究費取り扱い要領」の「７．申請できる経費」に準じますのでご確認ください。要領と異なる取扱いを希望する場合は、その理由と算出根拠を記載してください。
・限られた予算を有効に配分するため、既に研究室に備えられているパソコン、プリンター、総務部で貸出をしているデジカメ、ビデオカメラ、ICレコーダー等の申請はできるだけご遠慮ください。特別な事情により申請をする場合は、計画書に申請理由を添付してください。

3. 対象期間

2012年4月1月～2013年3月31日

4. 研究成果の提出

・研究代表者は、研究期間内における研究課題の成果を取りまとめ、研究成果報告書を2013年6月末日までに保健福祉実践開発研究センターに提出してください。
・研究代表者は、保健福祉実践開発研究センターが企画する報告会等で発表する義務を負います。

5. 審査の方法

保健福祉実践開発研究センターは、配分案を検討するにあたり、申請された計画書に対して以下の項目を目安にして審査をします。
（1）本学周辺地域の保健医療福祉の向上にどのように貢献できるか
（2）本件が地域との基盤作り等である場合の将来展望
（3）実施方法、申請経費の妥当性
（4）専門職および地域との連携に関するアピールポイント

２．公開講座

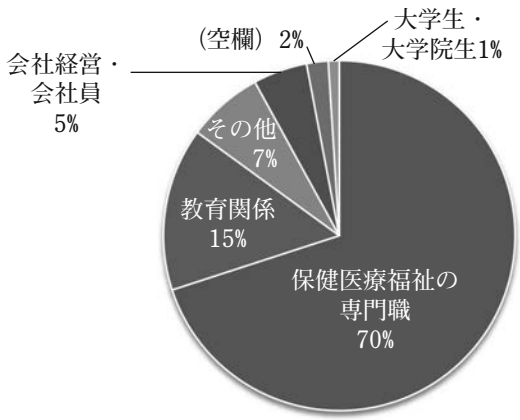
当センターでは、専門職向けの講座を「公開セミナー」、一般向けの講座を「市民公開講座」として毎年度開催しています。公開セミナーは本学教育の特徴である「IPW（専門職連携）」と「リーダーシップ」をテーマとし、市民公開講座は時勢やニーズに合わせたテーマを年度ごとに設定しています。2012 年度市民公開講座は「減災」と「健康長寿」をテーマに実施しました。

１）公開セミナー①　リーダーシップに関する公開セミナー

（１）概要

タイトル：「やる気マネジメントとリーダーシップ」
日時：2012 年 6 月 30 日（土）13 時 30 分～15 時 30 分
講師：遠藤 明氏（DHL ジャパン株式会社執行役員、人事本部長）
対象：保健医療福祉の専門職者他
参加者：定員 150 名　　参加 160 名　　申込 188 名　（出席率 85.1%）
アンケート回収：142 件　（回収率 88.8%）

（２）参加者職業内訳（合計 160 名）



保健医療福祉の専門職：看護師 51 名、介護関連職 18 名、理学療法士 4 名、作業療法士 3 名他
教育関係：幼稚園 6 名、こども園 4 名、保育園 2 名、中学養護教諭 3 名他

（３）アンケート結果

設問 1.　参加しようと思った理由、目的は何ですか？

「自身が職場の中でリーダー的地位となった。どのような心構えで業務にとりくむべきか悩むことが多かったので。」など新たにリーダー的な立場となったが、どの様に取り組んでいったら良いのかヒントを得たくて参加した方、また「管理職として自分がどうあるべきなのか、又職場環境を良くするためにスタッフのモチベーションをどう上げていくかを知りたかった。」など現在の仕事での悩みや職場で役立てたいという方々が全体の半数を占めた他、「やる気マネージメントとリーダーシップというタイトルにひかれた」「遠藤先生のお話を聞きたくて」という声も多く、テーマや講師の先生に対する期待の高さが伺えました。

設問２・３　　目的は達成できましたか？　その理由

96%が「目的を達成できた」と回答しました。「リーダーの役割、期待されていることが、具体的に知ることができた。自分自身、相手の意欲を高める具体的な方法を知ることができた。」「明日から実践できる内容だった。具体的な話を聞いて、自分もやってみようと思えた。」など、日々の職場で実践的に役立つヒントを得たとの回答も見られ、全体的に満足度の高い声が多く挙がりました。

設問４　今回の講座の感想

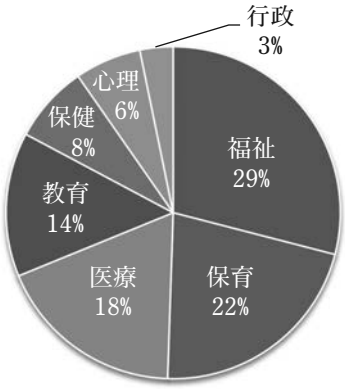
「とても聴きやすく、勉強になりました。今日のセミナーを今後活かして仕事に取り組んでいきたい。」「自らの経験に基づいた大変説得力のあるお話で、今日から自分がどうあるべきかを考えるよい機会となった。」など話の内容がとても分かり易い、具体的にすぐに実行に移していきたい、非常に良かった、やる気が出たなど参加できて良かったとする回答がほとんどでした。自分自身を見つめる上で良い機会になり、参加者の方にとって得たものは大きかったのではと思われます。

２）公開セミナー②　IPW（専門職連携）に関する公開セミナー

（１）概要

タイトル：「ネットワークで発達障がいのライフステージを理解する」
日　　時：2012 年 7 月 28 日（土）13 時 30 分～16 時 30 分
講　　師：大嶋　正浩　氏（医療法人社団至空会　ﾒﾝﾀﾙｸﾘﾆｯｸ･ﾀﾞﾀﾞ院長、児童精神科医、浜松市発達障害児者支援体制整備検討委員会座長）
パネラー：和久田 学 氏（大阪大学大学院特任講師）【特別支援教育】
鈴木厚志 氏（京丸園株式会社代表取締役）【発達障害者就労支援】
伊藤信寿 准教授（本学ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ学部作業療法学科）【作業療法士】
ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ：大場義貴准教授（本学社会福祉学部社会福祉学科）【臨床心理学、精神保健ｿｰｼｬﾙﾜｰｸ】
対象：保健、医療、福祉、心理、保育、教育、リハビリテーション、雇用、行政などの専門職者
定員：100 名　　参加：160 名　　申込：209 名　（出席率 76.6%）
アンケート回収：138 枚　（回収率 86.3%）

（２）参加者職業内訳（合計 160 名）



（3）アンケート結果

設問１　　参加しようと思った理由、目的は何ですか？

「現在の仕事、職場で役立てたい」「発達障がいについて理解を深め（学び）たかった」「講師の方に関心があり、話を聞きたかった」「テーマに興味があった」などの理由が挙げられました。また、「仕事で発達障がいの人や家族と接することがあるが、幼児期と成人期しか会う事がなくライフステージを理解したかった」「発達ステージに応じたネットワークの構築について学びたかった」というように、今回の講座の大きなポイントである「ネットワーク」や「ライフステージ」というキーワードに関心が寄せられた様子が伺えました。

設問２・３　　目的は達成できましたか？　その理由

84％の方が「できた」と回答しました。「それぞれのライフステージに合わせて発達障がいをよく理解できた」「接し方、支援する方法を理解できた」「様々な分野（立場）からの意見が聞けた」「現状を理解できた」「今後に希望を持てた」という声が挙がりました。自分が関わりのあるひとつの段階だけではなくライフステージで発達障がいを捉えるという視点が新鮮だった様子が伺えました。「達成できなかった」と回答された 9％の方の理由は「もっと多くを知りたい」「時間が短かった。もっとこの続きを聞きたかった」という前向きな声でした。

設問４　　今回の講座の感想

「事例を挙げてくださり、分かりやすく、納得することができた」「新しい視点からの切り込み方が分かり視野が広がった」「多方面での先生方のお話を聞かせて頂き、発達障がいの子を長い目で見られ、みんなとの連携が大切であること、小さい時からの関わりが重要ということで今後の自分の仕事に責任を感じる良い機会となった」「現在の専門の先生方や支援者の方々の取り組みや、今後の見通しがわかって大変勉強になった」など受講者の方が多くの学びを得られた事がわかる感想が寄せられました。また「京丸園のビジョンと実践に感銘した」など京丸園さんの取り組みを初めて知り、関心を持ったという声が多く聞かれました。

3）市民公開講座①　減災に関する市民公開講座

（1）概要

タイトル：「備える！災害時のセルフケア＆みんなのケア」（全３回）

日時・テーマ・講師：

	第１回	第２回	第３回
日付	11 月 10 日(土)	11 月 19 日(月)	11 月 24 日(土)
時間	13：30～15：00	19：00～20：30	13：30～15：00
テーマ	災害時に起こる病気とその予防を学ぼう	災害時の体力低下を防ぐ運動を学ぼう	避難所の生活を考えよう -こどもと高齢者の目から-
講師	鈴木知代 教授 （看護学部） 今福恵子 氏 （静岡県立大学短期大学部 看護学科講師）	矢倉千昭 准教授 （リハビリテーション学部 理学療法学科） 鈴木達也 助教 （リハビリテーション学部 作業療法学科）	落合克能 助教 （社会福祉学部社会福祉学科） 細田直哉 助教 （社会福祉学部 こども教育福祉学科）

対象：一般の方（減災に関心のある方）

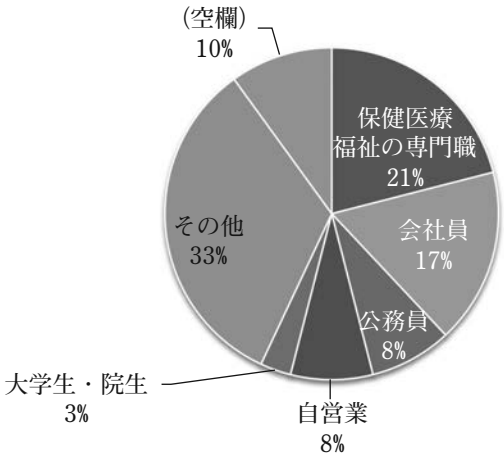
参加者：　定員　各回 50 名

【第 1 回】参加：42 名　申込：55 名　（出席率　76.4%）
【第 2 回】参加：33 名　申込：47 名　（出席率　70.2%）
【第 3 回】参加：36 名　申込：53 名　（出席率　67.9%）
【全 3 回延べ】参加：111 名　　申込：155 名　（出席率　71.6%）
修了証授与者（全 3 回のうち 2 回以上出席者）38 名

アンケート回収：

【第 1 回】38 件（回収率 90.5%）　【第 2 回】28 件（回収率 84.8%）
【第 3 回】30 件（回収率 83.3%）

（2）参加者職業内訳（合計 111 名）



（3）アンケート結果

設問 1.　参加しようと思った理由、目的は何ですか？

「災害時における対応を知識として身に着けて有事に備えたい」、「知識を得たうえで何かしら人の役に立ちたい」という声が半数を占めました。その他半数は、「災害ボランティアコーディネーターとして広範囲に情報を得たい。」「地域防災指導員として勉強したいと思った。」「看護協会で災害研修をしている。」などのように、何らかの役職に携わっており、役立てたいと言う声が多く挙がりました。

設問 2・3　目的は達成できましたか？　その理由

「目的を達成できた」との回答は、第 1 回：87%、第 2 回 86%、第 3 回 86%でした。

第 1 回「実体験を基にした説明が参考になった。」「避難所生活での健康問題について具体例を知ることができた。」など具体的な事案が聞けて分かりやすかったことについて満足の声が多かったです。第 2 回「深部静脈血栓病を予防する為の体操等が今回の目的にマッチしていた」「弾性ストレッチの有効性を学ぶことができた」など避難所での状況に応じた色々なケアの方法が具体的に学べて満足とする声が挙がりました。第 3 回「HUG（避難所運営ゲーム）を通して多くの人の考えを聞くことが出来て良かった。実践的なことが学べた。」「情報の分析がいかに大切かわかった。短い時間で情報処理する力を持ちたい。」など避難所設置時の注意点や情報共有の重要さ等を気づくことができ満足とする声が多かったです。

設問４　今回の講座の感想

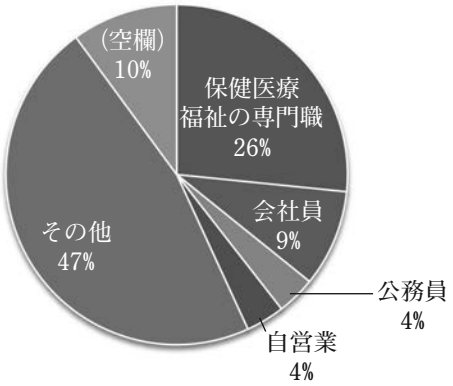
第１回「良かった、勉強になった、参考になった、役に立った、分かりやすかった」「区内の活動や民間でボランティアをされている方々の意見が聴けて良かった」、第２回「分かりやすかった、勉強になった」「日々の健康管理に役立てていきたい」、第３回「HUG を通して具体的疑似体験ができ、多くの気づきを得た。」など多くの参加者の方から満足度の高い感想をいただきました。

４）市民公開講座②　健康長寿に関する講座

（１）概要

タイトル：「健康長寿のためにできること」
日時：2012 年 12 月 22 日（土）13 時 30 分～15 時 00 分
講師：遠藤 英俊氏（国立長寿医療研究センター内科総合診療部長）
対象：健康長寿に関心のある一般市民の方
参加者：　定員 150 名　　参加 109 名　　申込 140 名（出席率 77.9%）
アンケート回収：93 件　（回収率 85.3%）

（２）参加者職業内訳（合計 155 名）



その他：無職(20 名)、主婦(6 名)、パート(4 名)、ボランティア(2 名)、農業(2 名)など 51 名

（３）アンケート結果

設問 1.　参加しようと思った理由、目的は何ですか？

「若い人の世話にならず、元気で年を重ねたいと思い参加した」「生活習慣病が気になる年令になり、どう生活変容させていくべきなのか知りたい」など自分自身の健康のために学習したいという方、「認知症の最新情報知識を得て整理したかった」「老人施設に勤務している為、入居者に役に立てたい」「両親が認知症にかかったので、どのように対応したらよいかと思って」など職場や家庭で役立てたいという方が多くいらっしゃいました。また「メディアで取り上げられている、遠藤英俊先生の講演を１度聞いてみたいと思ったから」という声も多く挙がりました。

設問２・３　　目的は達成できましたか？　その理由

「認知症の正しい理解ができた。健康寿命をのばすポイントがよく理解できた」「認知症の予防治療についてとても詳しく理解できた」など認知症に関する理解を深めることが出来たという声、「普段からできる予防方法を教えてもらったので、ぜひ役立てたいと思った」「介護施設で働いているが大変勉強になった。今後の施設でのケアに活用したい」など日頃の生活や職場で役に立てていきたいとの声が多く挙がり、「目的を達成できた」という声は全体の 95%と高い満足度でした。

設問４　今回の講座の感想

「ユーモアたっぷりで楽しかった」「とても分かり易くよく理解できた」「時間を忘れて話に集中した」など先生の話が興味深かったこと、また、「勉強したことを実践して楽しい老後を過ごしたいと思う」「今後の自分の長寿の生活の参考になった」「非常に勉強になり、ここに来た事に意義があった。」など、今後生活していく上での参考として、多くを学び取ってもらえた様子が伺えました。

３．　研修会講師等派遣

当センターが窓口となり、静岡県内で実施した講師等派遣の一覧です。

※合計43件／担当教員の所属・職位は2012年当時

１）専門職対象

No.	主催	内容	担当
1	静岡県公立・私立高等学校養護教諭自主研修会	養護教諭自主研修会 テーマ：生徒理解を深める「事例検討会」 対象：静岡県公立・私立高等学校養護教諭等	社会福祉学部 こども教育福祉学科 石川瞭子　教授
2	浜松市きらめき研究会	小・中学校養護教諭事例検討会 テーマ：各校で苦慮している事例への対応等 対象：浜松市内小・中学校養護教諭	社会福祉学部 こども教育福祉学科 石川瞭子　教授
3	吉田牧之原ケアマネジャー連絡会	平成24年度総会・研修会 テーマ：地域で暮らす精神障がい者との関わり方 対象：吉田牧之原ケアマネジャー連絡会会員	看護学部 入江　拓　准教授
4	聖隷三方原病院 リハビリテーション部	高次脳機能障害自動車運転勉強会、関係者会議 対象：研究関係者	リハビリテーション学部 作業療法学科 建木 健　助教
5	聖隷福祉事業団	キャリアアップ研修　第1回 テーマ：介護倫理の基礎知識 対象：福祉施設や在宅で介護に従事する方	社会福祉学部 臨床介護福祉学科 中村裕子　教授
6	静岡市保健福祉子ども局子ども青少年部保育課	静岡市公立保育園研修・興津ブロック研修会 テーマ：事例検討への取り組みと保育内容について 場所：清水区役所蒲原支所 対象：静岡市公立保育園興津ブロック保育士	社会福祉学部 こども教育福祉学科 細田直哉　助教
7	聖隷福祉事業団	福祉従事者研修・ＯＪＴ推進リーダーコース テーマ：介護過程の展開 場所：聖隷研修センター 対象：福祉施設や在宅で介護に従事する方	社会福祉学部 臨床介護福祉学科 中村裕子　教授
8	特別養護老人ホーム山崎園	園内研修会 テーマ：利用者とのコミュニケーション・援助技術 対象：山崎園の介護職員の方	社会福祉学部 社会福祉学科 横尾恵美子　教授
9	浜松市教育委員会 学校教育部	テーマ：質問応答関係検査による実態把握と指導の手掛かりについて 対象：通級指導教室（言語）担当者・指導課指導主事の方	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 池田泰子　助教
10	静岡県言語・聴覚・発達障害教育研究会	各小学校ことばの教室における構音障がい児への指導法研修会 ①可美小学校　②北浜小学校　③気賀小学校 ④磐田中部小学校　⑤双葉小学校 対象：各校の言葉の教室担当教員	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 ③④藤原百合　教授 ②⑤池田泰子　助教 ①中村哲也　助教

No.	主催	内容	担当
11	浜松医療センター	看護研究基礎コース テーマ：論文の書き方 対象：看護研究に関心のある浜松医療センター看護師、副看護長	看護学部 佐藤道子　准教授
12	静岡大学	静岡大学教員免許状更新講習 テーマ：障害を持つ子どもへの作業療法と養護教諭の専門性 対象：静岡県内の現職教員40名程度	リハビリテーション学部 作業療法学科 伊藤信寿　准教授 看護学部 高橋佐和子　助教
13	カウンセリング・マインドを学ぶ会	カウンセリング・マインドを学ぶ会研修会 テーマ：教職員のメンタルヘルス 保護者のクレームに負けないために今何をすべきか 対象：市内小中学校教職員、きらめき研究会会員	社会福祉学部 こども教育福祉学科 石川瞭子　教授
14	静岡県教職員組合 浜松支部	養護教員部学習会 テーマ：メンタルヘルスを考える～音楽療法と心身一如～ 対象：市内小中高校の養護教諭	社会福祉学部 こども教育福祉学科 店村眞知子　准教授
15	浜松市障害保健福祉課	手話奉仕員養成講座入門課程 テーマ：聴覚障害者の基礎知識 場所：浜松市北区役所、東区役所	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 石津希代子　准教授
16	磐田ケアマネ連絡会、磐田市地域包括支援センター	合同研修会 テーマ：スーパービジョンについて 対象：磐田ケアマネ連絡会会員	社会福祉学部 社会福祉学科 落合克能　助教
17	浜松市教育委員会 学校教育部	浜松市スクールカウンセリング事業第2回連絡協議会 テーマ：思春期メンタルヘルス調査から見えてきたこと 対象：浜松市内養護教諭・スクールカウンセラー等	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴　准教授
18	浜松市教育委員会 学校教育部	巡回相談・発達支援学級在籍児で発音に問題のある生徒についての対応方法を助言 対象：発達支援学級在籍児、教員	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 池田泰子　助教
19	浜松医療センター	看護研究基礎コース テーマ：プレゼンテーションの方法 対象：浜松医療センターの勤続3年目の看護師	看護学部 佐藤道子　准教授
20	静岡県言語・聴覚・発達障害教育研究会	平成24年度静岡県言語・聴覚・発達障害教育新任者研修会 テーマ：音の発達と構音指導の実際 対象：静岡県言語・聴覚・発達障害教育関係者	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 池田泰子　助教
21	浜松NPOネットワークセンター　N-Pocket	静岡県ジョブコーチ養成事業2012 テーマ：①これからの精神保健福祉 ②障害をもつ人から学んだメンタルヘルス 場所：浜松ＮＰＯネットワークセンター 対象：ジョブコーチインターン、ジョブコーチ、ICTによる障がい者支援スタッフ	社会福祉学部 社会福祉学科 佐々木敏明　教授

No.	主催	内容	担当
22	静岡県自治会連合会 西部支部	静岡県自治体連合会西部支部研修会 テーマ：高齢者等の見守り 対象：県自治会連合会西部支部管内自治会長	社会福祉学部 社会福祉学科 落合克能　助教
23	浜松市社会福祉協議会 東区地区社協推進協議会	平成24年度日常生活自立支援事業担当者等研修会 テーマ：個別援助技術・面接技法について 対象：東区6地区に設立されている地区社協にて活動されている方	社会福祉学部 社会福祉学科 落合克能　助教
24	静岡県介護福祉士会	「介護福祉ニーズに視点をおいた介護過程」の展開方法の研修 対象：有資格者で実務経験が3年以上ある方かつ担当ケースを持っている方	社会福祉学部 臨床介護福祉学科 杉山せつ子　講師
25	浜松労働基準監督署、 浜松労働基準協会	社会福祉施設労働災害防止対策講習会 テーマ：腰痛防止対策等 対象：施設等に勤務する職員（介護士・看護師・保育士等）の方	リハビリテーション学部 理学療法学科 矢倉千昭　准教授
26	地域包括支援センター 大平台	浜松市西区のケアマネジャー対象の研修会 テーマ：介護支援専門員のセルフケア 対象：西区内居宅介護支援事業所のケアマネジャー	社会福祉学部 社会福祉学科 福田俊子　准教授
27	浜松市社会福祉協議会	地区社会福祉協議会研修会 テーマ：地区社協活動のあり方とこれから 対象：地区社会福祉協議会の職員	社会福祉学部 社会福祉学科 佐藤順子　准教授
28	静岡県社会福祉士会	西部支部研修会 テーマ：ひきこもり支援について 対象：静岡県社会福祉士会職員	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴　准教授
29	田原市立中央図書館	回想法実践知識（講義）と回想法演習（演習） テーマ：聞いて！はなして！みんなでおしゃべり回想 対象：病院福祉施設関係者、回想法に興味のある方	看護学部 梅本充子　准教授

２）市民対象

No.	主催	内容	担当
1	浜松市ことばを育てる親の会	浜松市ことばを育てる親の会総会・講演会 対象：浜松市ことばを育てる親の会会員	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 中村哲也　助教
2	天竜病院神経内科患者付添い人の会	音楽療法の会／出前講座 テーマ：音楽療法による脳刺激 対象：神経内科の主に寝たきりの患者の方	社会福祉学部 こども教育福祉学科 店村眞知子 准教授
3	公益財団法人静岡県労働者福祉基金協会	ライフサポートセンターしずおか事業部セミナー テーマ：こころとからだを元気にするセルフケア 対象：一般市民の方	社会福祉学部 臨床介護福祉学科 杉山せつ子　講師
4	浜松市内の小・中学校	小・中学校で実施する健康教育「学校保健委員会」 北浜東部中学校、伎部小学校、北浜東部中学校、浜北小学校、細江中学校、三方原中学校、豊岡小学校、三方原小学校、気賀小学校学校、田市立初倉中学校 対象：各小中学校の児童・生徒・保護者	看護学部 高橋佐和子　助教 伊藤純子　助教
5	浜松市立新津公民館	出前講座 テーマ：音楽があなたの若々しさにもたらす贈り物 対象：55～90歳の松風大学生	社会福祉学部 こども教育福祉学科 店村眞知子 准教授
6	全国パーキンソン病友の会静岡県支部	友の会西部地区医療講演会 テーマ：パーキンソン病に有効的な言語療法 対象：県内のパーキンソン病患者及び家族、一般の方	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 藤原百合　教授
7	浜松特別支援学校朝霧分教室	出前講座 テーマ：親子ストレッチ＆マッサージ体操 対象：児童生徒、保護者、教員	社会福祉学部 こども教育福祉学科 和久田佳代 講師
8	浜名湖エデンの園	介護予防講座 テーマ：食事のリハビリ―健口は健康の源です― 対象：入居者の方（主に70～90代の高齢者）	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 小島千枝子　教授
9	浜松市浜松手をつなぐ育成会	青少年福祉ボランティアリーダー育成研修会 テーマ：思春期・青年期のメンタルヘルス 対象：高校生以上の生徒・学生	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴　准教授
10	浜松市立浜名公民館	出前講座 テーマ：メンタルヘルスを考える～音楽療法と心身一如～ 対象：65歳以上の市民の方（寿大学受講者）	社会福祉学部 こども教育福祉学科 店村眞知子 准教授

No.	主催	内容	担当
11	浜松十字の園	リハビリ教室 テーマ：介護予防体操 対象：入居者の方、地域の方	リハビリテーション学部 作業療法学科 鈴木達也　助教
12	浜名湖エデンの園	介護予防講座 テーマ：転倒予防最前線（ロコモーション体操、認知と運動の二重課題） 対象：入居者の方（主に70～90代の高齢者）	リハビリテーション学部 理学療法学科 吉本好延　准教授
13	ＮＰＯ法人てくてく	テーマ：家族について考える（講演とグループワーク） 対象：てくてく会員及びひきこもり当事者	社会福祉学部 社会福祉学科 大場義貴　准教授
14	浜松市立麁玉公民館	出前講座 テーマ：介護サービスの利用方法とケアマネジャーの役割 対象：平均77歳の対象者（寿大学受講者）	社会福祉学部 臨床介護福祉学科 野田由佳里　助教

4．　保健医療福祉団体の委員等派遣状況

※担当教員の所属・職位は2012年当時

No.	内容	担当
1	浜松市介護認定審査会　委員 任期：2011年4月1日～2013年3月31日 主催：浜松市健康福祉部	看護学部 　篁　宗一　准教授 　炭谷正太郎　助教 　小池武嗣　助教 　岩清水伴美　助教 リハビリテーション学部 　西田裕介　教授 　大町かおり　教授 　前野竜太郎　准教授 　鈴木達也　助教
2	浜松市母子保健推進会議　委員 任期：2012年4月1日～2014年3月31日 主催：浜松市	看護学部 　黒野智子　准教授
3	浜松市精神医療審査会　委員 任期：2011年4月1日～2013年3月31日 主催：浜松市精神保健福祉センター	看護学部 　清水隆裕　助教
4	浜松市人権施策推進審議会　委員 任期：2012年4月1日～2014年3月31日 主催：浜松市	社会福祉学部 社会福祉学科 　横尾惠美子　准教授
5	浜松市福祉人材バンク運営委員会　委員 任期：2012年4月1日～2014年3月31日 主催：浜松市社会福祉協議会	社会福祉学部 社会福祉学科 　佐藤順子　准教授
6	平成24年度浜松市子ども・若者サポートネット代表者会議 アドバイザー 任期：2012年4月1日～2013年3月31日（年2回程度） 主催：浜松市子ども家庭部（浜松市青少年育成センター）	社会福祉学部 社会福祉学科 　大場義貴　准教授
7	平成24年度浜松市自殺対策連携会議　委員 任期：2012年4月1日～2013年3月31日 主催：浜松市健康福祉部健康医療課	社会福祉学部 社会福祉学科 　大場義貴　准教授
8	平成24年度第1回浜松市ひきこもり地域支援センター企画検討委員会 及び平成24年度第1回浜松地域若年者就労支援推進協議会　構成員 主催：浜松市精神保健福祉センター、浜松市産業部	社会福祉学部 社会福祉学科 　大場義貴　准教授
9	平成24年度浜松市発達障害児者支援体制整備検討委員会　委員 任期：2012年7月26日～2014年3月31日 主催：浜松市こども家庭部子育て支援課	社会福祉学部 社会福祉学科 　大場義貴　准教授
10	浜松市発達支援教育専門家チーム会議（浜松第2班）　委員 日時：2012年7月10日（火）、10月16日（火）、11月20日（火）、 　　2013年1月15日(火) 主催：浜松市教育委員会学校教育部	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 　池田泰子　助教

５．　研究支援

No.	内容	担当
1	内容：浜松労災病院看護部　看護研究の支援 対象：浜松労災病院の看護職の方	看護学部 　渡邉順子　教授 　坂田五月　准教授
2	浜松市根洗学園　併行通園支援事業支援 内容：利用者の言語評価、療育プログラム構築、保護者支援 期間：2012年10月2日～2013年3月14日 対象：併行通園利用者	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 　足立さつき　講師
3	浜名湖エデンの園　園内学会　審査員 内容：浜名湖エデンの園職員の福祉研究発表の審査	リハビリテーション学部 理学療法法学科 　矢倉千昭　准教授
4	小羊学園　研究発表会　審査員 内容：小羊学園の施設・事業所より6題の研究発表に係る審査	社会福祉学部 社会福祉学科 　大場義貴　准教授

６．資　料

（1）ニュースレター第４号（年１回発行）

発行：2012 年６月　　11,000 部

内容：

・センター長挨拶「研究成果を地域へ」

・地域と歩む研究紹介

①連携・協働の道を探る～言語聴覚士（ＳＴ）と教育現場～

②「やっぱりここでの暮らしを続けたい！」その願いを叶えるために

・2012 年度公開講座のご案内

・2012 年度地域貢献事業研究費　採択研究一覧

配布先：

実習施設、就職施設、聖隷グループ、卒業生、同系他大学、臨床教授等、市内図書館・公民館など

（2）チラシ制作

①公開講座案内

種類	講座タイトル
公開セミナー	やる気マネージメントとリーダーシップ
公開セミナー	ネットワークで発達障害のライフステージを理解する
市民公開講座	災害時のセルフケア＆みんなのケア
市民公開講座	健康長寿のためにできること

②地域貢献研究事業 2012 年度報告会案内

(3) ホームページの更新

URL：http://blg.seirei.ac.jp/healthscience/

大学ホームページトップからリンクしています。

①ニュース記事の更新履歴

No.	更新日	ニュース記事タイトル
1	2013/1/4	市民公開講座「健康長寿のためにできること」を実施しました。
2	2012/9/12	2012 年度市民公開講座のお知らせ
3	2012/7/31	公開セミナー「ネットワークで発達障がいのライフステージを理解する」を実施しました。
4	2012/7/10	7 月 28 日(土)「ネットワークで発達障がいのライフステージを理解する」申込を〆切らせて頂きました。
5	2012/6/25	今週土曜 6 月 30 日「やる気マネジメントとリーダーシップ」開催します。
6	2012/5/25	専門職向け公開セミナーの申込受付中です。
7	2012/4/24	2012 年度公開セミナーの申込みを開始しました。
8	2013/4/16	2012 年度もよろしくお願いいたします。

②更新ページ

・地域貢献研究事業

2012 年度地域貢献研究事業費採択課題一覧を掲載

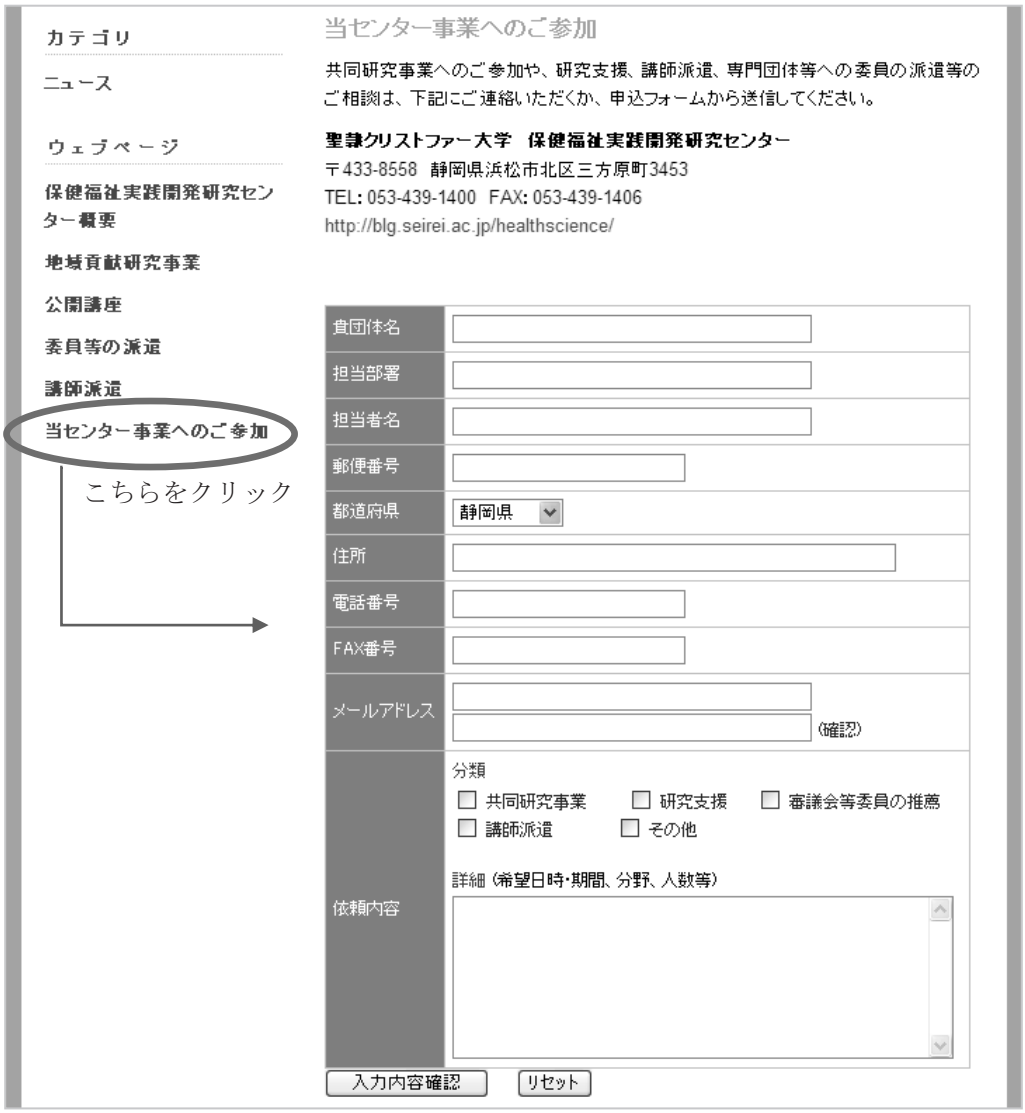
・公開講座

2012 年度公開講座案内を掲載、インターネット申込フォーム

③当センターへの問合せ方法

ホームページに問合せフォームを設置していますので、ぜひご活用ください。

URL：http://blg.seirei.ac.jp/healthscience/form.html



電話でのお問合せ先：053-439-1400（大学代表）

地域と歩む
聖隷クリストファー大学
保健福祉実践開発研究センター
Community-Based Practice and Research Center for Health and Welfare
ニュースレター
News letter 2012.6 Vol.04

研究成果を地域へ

保健福祉実践開発研究センター長　小島 千枝子

当センターは大学院博士後期課程の開設を機に2009年10月に設置され、保健医療福祉分野における1）共同事業・研究、2）専門職への研修・一般市民への学習機会の提供、3）政策形成への貢献、4）地域に開かれた相談窓口を主な事業として取り組んでまいりました。このうち1）の事業に関しては、今年度は地域の実践現場とともに共同で行う「研究」に重点を置き、研究成果を地域へ還元することを目標に名称を「地域貢献事業研究」とし、取り組んでまいります。

また、今年度も当センターが主催して、専門職対象の公開セミナー、市民公開講座を開催します。2011年度に実施された地域貢献研究事業の報告会は、聖灯祭・ホームカミングデー（11月3日）との同日開催を予定しております。

保健福祉実践開発研究センターが行うこれらの事業に多くの方にご参加いただき、さまざまなご意見やご要望をお寄せいただき、それをもとに更に「地域とともに歩むセンター」として歩みを進めてまいりたいと思います。

目　次

◆"地域と歩む"研究紹介①
連携・協働の道を探る
～言語聴覚士（ST）と教育現場～

◆"地域と歩む"研究紹介②
「やっぱりここでの暮らしを続けたい！」
その願いを叶えるために

◆2012年度公開講座のご案内

◆2012年度地域貢献事業研究費
採択研究一覧

お知らせ

地域貢献研究事業 2012年度報告会

◆日時／2012年11月3日（土）
10：00～15：00（予定）
＜聖灯祭・ホームカミングデー同日開催＞

◆場所／聖隷クリストファー大学

※2011年度採択事業の報告会です。
詳細はホームページ等でご案内します。

保健福祉実践開発研究センターとは：

「地域と歩む」をキーワードに、保健医療福祉の実践現場との共同研究・共同事業、地域の専門職向け研修や一般市民への学習機会の提供、地域の自治体や専門分野に関わる団体への協力、地域に開かれた相談窓口等を通して、地域の保健医療福祉の更なる質の向上に寄与するための活動に取り組んでいます。

保健福祉実践開発研究センター地域貢献研究事業費助成研究

連携・協働の道を探る
～言語聴覚士（ST）と教育現場～

◆研究代表者：リハビリテーション学部言語聴覚学科 池田泰子 助教
（専門:言語聴覚士、特別支援教育、ひらがな文字、早期発見・早期療育）
◆共同研究者の所属：聖隷浜松病院、浜松市根洗学園、浜松医療センター、市内小学校2校、浜松市教育委員会等
◆研究課題名：「言語聴覚士が浜松市発達支援学級で担える役割を探る」

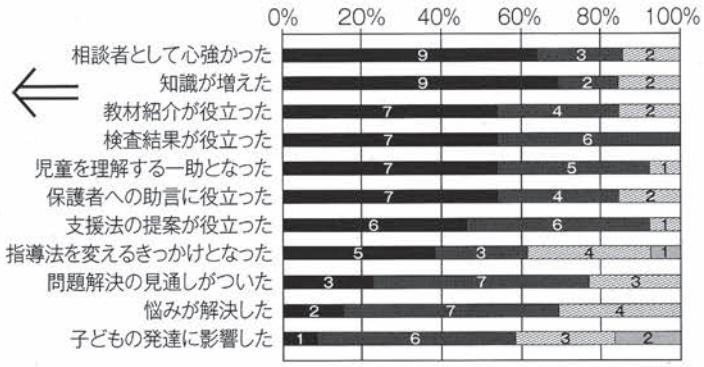
言語聴覚士（ＳＴ）が対象としているのは主にコミュニケーションの障害（ことば、聴こえ、発音、摂食・嚥下、認知症や記憶障害などの高次脳機能障害）で、研究代表者がＳＴとして学習障害等の通級指導教室、ことばの教室、特別支援学級・学校などの教育現場と連携を行った経験から、ＳＴの専門性は教育において役に立つものであると実感しています。しかし浜松市の小学校・特別支援学校小学部対象の調査によると、ＳＴの認識度が低いことがわかっています。教育現場とＳＴが連携し、よりよい支援を実現するためには、まずはＳＴの専門性を理解していただく必要があります。浜松市の関係機関との共同研究や地域活動を通して、連携の道を探っています。

浜松市の公立小学校発達支援学級担当教諭を対象にアンケート調査

⇒

7校をモデル学級として実際に連携（児童のアセスメント）を行い、連携の評価をアンケート調査

【連携の成果】



STとの連携に興味あり
44%

⇐

【今後の課題】
①検査結果を集団場面で活かせるように助言すること
②STが学校を定期的に訪問するための体制づくり

◆浜松市の特別支援教育に関する池田助教の地域活動例

静岡県言語・聴覚・発達障害教育研究会西部地区言語・聴覚・発達障害担当者講習会講師、浜松市教育委員会学校教育部通級指導教室（言語）研修会講師、浜松市健康増進課主催保健師研修会講師、浜松市根洗学園職員研修会講師、市内小学校ことばの教室での研修会講師や支援、特別支援学校PT・OT・ST等活用事業（アドバイザー）、浜松市教育委員会学校教育部浜松市発達支援教育専門家チーム会議委員など多数

教育現場から:白井有希乃教諭のコメント
（浜松市立双葉小学校 通級指導教室（言語）担当）

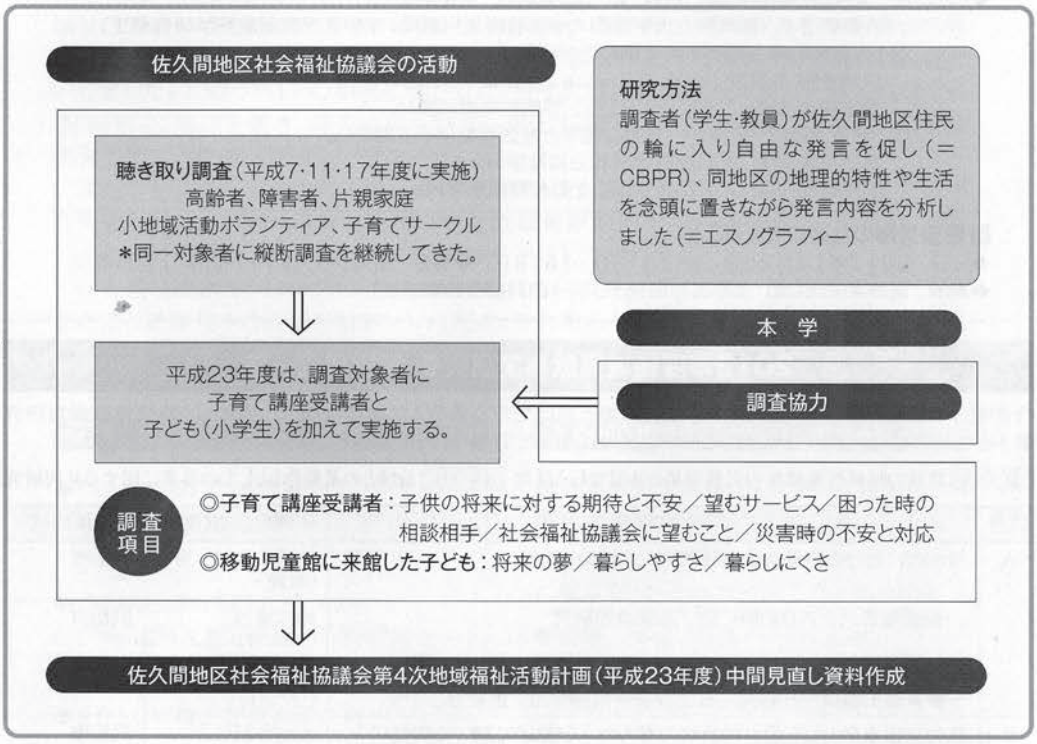
「池田先生の指導を実際に拝見して、指導法だけでなく、流れや声かけの仕方等、多くの事を学び、すぐに自分の指導に活かすことができました。また、同じ地域の中に専門家がいて相談できることを、とても心強く感じています。」

保健福祉実践開発研究センター地域貢献研究事業費助成研究

「やっぱりここでの暮らしを続けたい!」その願いを叶えるために

◆研究代表者：看護学部 仲村秀子 講師（専門:公衆衛生看護学）
◆共同研究者の所属：浜松市社会福祉協議会天竜地区センター
◆研究課題名：「コミュニティを基盤とした参加型研究方法
(Community-Based Participatory Research:CBPR)を用いたコミュニティ・ニード調査」

本学学生と教員が「浜松市都市と山村フレンドシップ事業」の一環で浜松市天竜区の山村地域を見学したこと（当ニュースレターvol.3で紹介）がきっかけとなり、2011年度に佐久間地区社会福祉協議会が行う調査に協力することになりました。調査には本学看護学部の学生5名も参加し、調査の実施・分析を通して"住民から直接学ぶ"よい体験となりました。調査結果は、「佐久間地区社会福祉協議会第4次地域福祉活動計画（平成23年度）中間見直し資料」となります。



共同研究者:永井紀子さんのコメント
（浜松市社会福祉協議会天竜地区センター）

「今回は調査対象を広げて、佐久間町の将来を担うであろう子どもたちの思いを聴き、まとめることにしました。町外調査員（学生さんたち）が入ることによって、地元の人には言えない本音や年代が近いからこそ言える率直な気持ちを聴き取ることができたことは大きな収穫でした。」

2012年度公開講座のご案内 ※詳細は順次大学ホームページに掲載いたします。

主に専門職者向けの講座を「公開セミナー」、主に一般の方向けの講座を「市民公開講座」として開催いたします。インターネットまたはFAXでお申し込みください。多くの皆様方のご参加をお待ちしています。

【インターネット】大学ホームページ→公開講座 http://www.seirei.ac.jp/【FAX】053-439-1406

✣公開セミナー

1 やる気マネジメントとリーダーシップ

◆日時／2012年6月30日（土）13：30～15：30　◆場所／聖隷クリストファー大学 1701教室
◆講師／遠藤 明氏（DHLジャパン株式会社執行役員、人事本部長）

2 ネットワークで発達障がいのライフステージを理解する（講演&パネルディスカッション）

◆日時／2012年7月28日（土）13：30～16：30　◆場所／聖隷クリストファー大学 1701教室
◆講師／大嶋正浩氏（医療法人社団至空会メンタルクリニック・ダダ院長、児童精神科医、浜松市発達障害児者支援体制整備検討委員会座長）

✣市民公開講座

1 災害時における二次的な疾病を予防しよう（仮）

◆日時／全3回：①11月10日（土）②11月19日（月）③11月24日（土）
＊時間はホームページ等でお知らせします。　◆場所／聖隷クリストファー大学
◆講師／①「災害時の健康問題と対処」鈴木知代 教授（看護学部）、
今福恵子 氏（静岡県立大学短期大学部看護学科講師、本学大学院保健科学研究科生）
②「災害時の体力低下を防ぐ運動を学ぼう」
矢倉千昭 准教授（リハビリテーション学部理学療法学科）、
鈴木達也 助教（リハビリテーション学部作業療法学科）
③「避難所に何が必要か～生態心理学と社会福祉学の立場から」
落合克能 助教（社会福祉学部社会福祉学科）、
細田直哉 助教（社会福祉学部こども教育福祉学科）

2 健康長寿のためにできること

◆日時／2012年12月22日（土）13：30～15：30　◆場所／聖隷クリストファー大学 1701教室
◆講師／遠藤英俊氏（国立長寿医療研究センター内科総合診療部長）

2012年度地域貢献事業研究費 採択研究一覧

今年度から【地域の保健医療福祉の実践現場と共同で行う研究】に重点を置き、名称も「地域貢献事業研究費」と改めました。2012年2月に2つの区分について公募、4月に審査を行い、6件を採択しました。

区分A 地域の保健医療福祉の実践現場と共同で行う研究　区分B 地域との基盤作りとしての事業に関する共同研究

区分	研究課題	研究代表者（所属）	対象地域
A	掛川市における保健師の現任教育システムの構築	岩清水伴美（看護）	掛川市
	出張型陶芸クラブの効果に関する探索的研究	鈴木達也（リハOT）	浜松市
	言語聴覚士は療育園の療育においてどのような役割を担えるか ～療育園指導員が在籍児に言語検査を実施する支援を通して～	池田泰子（リハST）	浜松市
B	就労支援事業としての水耕栽培の導入および効果に関する調査研究	大町かおり（リハPT）	浜松市 袋井市
	地域在住高齢者を支えるリハビリサポート体制の構築	金原一宏（リハPT）	浜松市北区
	高齢者の居場所づくりによる街中にぎわい計画―世代を超えた絆づくり―	建木　健（リハOT）	浜松市（田町商店街）

※看護＝看護学部、リハ＝リハビリテーション学部、PT＝理学療法学科、QT＝作業療法学科、ST＝言語聴覚学科

【地域と歩む】保健福祉実践開発研究センター　ニュースレター　第4号
発行／聖隷クリストファー大学　保健福祉実践開発研究センター
〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453　TEL:053-439-1400　FAX:053-439-1406
Eメール:health-science@seirei.ac.jp　HP:http://www.seirei.ac.jp/

聖隷クリストファー大学
保健福祉実践開発研究センター
公開セミナー

●後援／浜松市

やる気マネジメントとリーダーシップ

受講無料

相手をやる気にさせるには？
そのやる気を持続させるには？
リーダーに求められる
"やる気マネジメント"の方法について
次のような問いをヒントに解説します。

成功・成就のために計画立てをしていますか？

現在の職業（専門職）に就くことを決めた時のことを覚えていますか？

なぜ人はその職に留まるのでしょうか？また留まらないのでしょうか？

開催日
2012年6/30(土)
13:30～15:30［受付開場13:00］
会場／聖隷クリストファー大学 1701教室
対象／保健医療福祉の専門職者他
定員／150名

講師
遠藤 明 氏

DHLジャパン（運輸世界最大企業）人事本部長・執行役員。バイオラ大学・生物科学専攻（米国カリフォルニア州）卒業。金融他いくつかの外資系企業において30年以上に渡り人事を担当。スイス・ユニオン銀行、リーマン・ブラザーズ社、リーバイ・ストラウス社、ゼネラル・エレクトリック社等の人事部長を歴任。ビジネスマンのためのコーチング・メンタリング講座にて活動中。趣味は旅行、読書（主に伝記）。キリスト者であり、ボランティアで聖書を教えている。

申込方法

●インターネットの場合　聖隷クリストファー大学ホームページ［http://www.seirei.ac.jp］→ 公開講座から
●FAXの場合 …… 聖隷クリストファー大学　保健福祉実践開発研究センター［053-439-1406］まで
（裏面の申し込み用紙をご利用ください）
氏名（ふりがな）・住所・メールアドレス・電話番号・FAX番号・職業・申込講座名をお知らせください。

申込締切 **6/20(水)**
※申込締切日以降に受講票を返信いたしますので、当日お持ちください。

聖隷クリストファー大学 保健福祉実践開発研究センター
〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453 TEL.053-439-1400 FAX.053-439-1406 http://www.seirei.ac.jp
看護学部／社会福祉学部／リハビリテーション学部／助産学専攻科
大学院博士前期課程・博士後期課程　看護学研究科／リハビリテーション科学研究科／社会福祉学研究科

交通のご案内
●バスでお越しの方
JR浜松駅北口バスターミナル15番ポール「聖隷三方原病院経由気賀・三ケ日行」乗車「聖隷三方原病院」下車徒歩約3分。
●お車でお越しの方
聖隷クリストファー大学第1駐車場をご利用ください。

聖隷クリストファー大学
保健福祉実践開発研究センター
公開セミナー

IPW（専門職連携）講座 受講無料

IPWとは…インタープロフェッショナルワークの略です。

ネットワークで
発達障がいのライフステージを理解する

共催／浜松市（浜松市発達障害児者支援体制整備検討委員会）

開催日 2012年 7/28（土） 13:30～16:30 [受付・開場13:00]

会場	聖隷クリストファー大学 1701教室
対象	保健、医療、福祉、心理、保育、教育、リハビリテーション、雇用、行政などの専門職者
定員	100名

近年、発達障がいという概念が取り入れられ、人間の発達にはかなりのバリエーションがあることが認知されてきました。さらにライフステージにより、養育環境や社会環境の影響で様々な変貌を遂げます。各ステージにおいて関わる専門職者たちがネットワークを作ることで、発達障がいの方の過去、未来をも理解した関わりの構築を目指します。

講演

●講師・コメンテーター

大嶋 正浩 氏

医療法人社団至空会　メンタルクリニック・ダダ院長
児童精神科医
浜松市発達障害児者支援体制整備検討委員会座長

昭和55年群馬大学医学部卒業。浜松医科大学精神神経科医局助手、関東中央病院精神科（児童思春期）病棟医長を経て、平成5年メンタルクリニック・ダダ開設。日本児童青年精神医学会評議員、静岡県社会福祉協議会委員、浜松市精神保健福祉審議会座長、浜松市発達障害児者支援体制整備検討委員会座長、浜松特別支援学校校医等。

パネルディスカッション

●パネラー

和久田 学 氏 大阪大学大学院特任講師［特別支援教育］

鈴木 厚志 氏 京丸園株式会社 代表取締役［発達障害者就労支援］

伊藤 信寿 准教授 本学リハビリテーション学部作業療法学科［作業療法士］

●コーディネーター

大場 義貴 准教授 本学社会福祉学部社会福祉学科［臨床心理学、精神保健ソーシャルワーク］

申込方法

●インターネットの場合　聖隷クリストファー大学ホームページ［http://www.seirei.ac.jp］→ 公開講座から
●FAXの場合 …… 聖隷クリストファー大学　保健福祉実践開発研究センター［053-439-1406］まで
（裏面の申し込み用紙をご利用ください）
氏名（ふりがな）・住所・メールアドレス・電話番号・FAX番号・職業・申込講座名をお知らせください。

申込締切 7/18（水）
※申込締切日以降に受講票を返信いたしますので、当日お持ちください。

聖隷クリストファー大学 保健福祉実践開発研究センター
〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453　TEL.053-439-1400　FAX.053-439-1406　http://www.seirei.ac.jp
看護学部／社会福祉学部／リハビリテーション学部／助産学専攻科
大学院博士前期課程・博士後期課程　看護学研究科／リハビリテーション科学研究科／社会福祉学研究科

交通のご案内

●バスでお越しの方
JR浜松駅北口バスターミナル15番ポール「聖隷三方原病院経由気賀・三ケ日行」乗車「聖隷三方原病院」下車徒歩約3分。
●お車でお越しの方
聖隷クリストファー大学第1駐車場をご利用ください。

聖隷クリストファー大学
保健福祉実践開発研究センター

市民公開講座

共催 社会福祉法人
浜松市社会福祉協議会

備える! 災害時の セルフケア& みんなのケア

ふだん健康な人も、災害時には過ごす環境が変化し、
こころとからだにダメージを受けます。
そのときはまず自分をケアして、体調をくずさないようにすること。
それが、周りの人と協力して災害時を乗り切ることにつながります。

全3回 受講無料

場所 聖隷クリストファー大学　対象 一般の方　定員 各回50名

2回以上出席の方には、修了証を発行します。　※1回だけの参加もできます。

第1回
災害時に起こる病気とその予防を学ぼう
看護

2012年11月10日(土)
13:30〜15:00(受付13:00〜)

自分の健康を守るために必要な準備と避難所での対策、感染症を予防するための対策について学びましょう。

講師
鈴木知代 教授
(看護学部)
今福恵子 氏
(静岡県立大学短期大学部看護学科講師)

第2回
災害時の体力低下を防ぐ運動を学ぼう
リハビリテーション

2012年11月19日(月)
19:00〜20:30(受付18:30〜)

体力低下や静脈血栓塞栓症を予防するため、避難所でもできる運動方法について学びましょう。

講師
矢倉千昭 准教授
(リハビリテーション学部理学療法学科)
鈴木達也 助教
(リハビリテーション学部作業療法学科)

第3回
避難所の生活を考えよう
−こどもと高齢者の目から−
社会福祉

2012年11月24日(土)
13:30〜15:00(受付13:00〜)

こどもと高齢者の目から見た避難所の問題点と改善策とは? 避難所のあり方を再考しましょう。

講師
落合克能 助教
(社会福祉学部社会福祉学科)
細田直哉 助教
(社会福祉学部こども教育福祉学科)

申込方法

●インターネットの場合　聖隷クリストファー大学ホームページ[http://www.seirei.ac.jp] → 公開講座から
●FAXの場合 …… 聖隷クリストファー大学　保健福祉実践開発研究センター[053-439-1406]まで
(裏面の申し込み用紙をご利用ください)
氏名(ふりがな)・住所・電話番号・FAX番号・PCメールアドレス・職業・申込講座名をお知らせください。

申込締切 10/31(水)
※申込締切以降に受講票を返信いたしますので、当日お持ちください。

聖隷クリストファー大学 保健福祉実践開発研究センター
〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453 TEL.053-439-1400 FAX.053-439-1406 http://www.seirei.ac.jp
看護学部／社会福祉学部／リハビリテーション学部／助産学専攻科
大学院博士前期課程・博士後期課程　看護学研究科／リハビリテーション科学研究科／社会福祉学研究科

交通のご案内
●バスでお越しの方
JR浜松駅北口バスターミナル15番ポール「聖隷三方原病院経由気賀・三ケ日行」乗車「聖隷三方原病院」下車徒歩約3分。
●お車でお越しの方
聖隷クリストファー大学第1駐車場をご利用ください。

聖隷クリストファー大学
保健福祉実践開発研究センター

市民公開講座

後援：浜松市

健康長寿のためにできること

健康長寿とは、高齢になっても健やかに生きることです。そのためには、生活習慣病や認知症の日頃からの予防が大切です。認知症の知識や、運動・食事による健康づくり、認知症になったときに地域で支え合える仕組みづくりなど、健康長寿のために今日からできることをお話しします。

開催日
2012年 12/22 [土]
13:30～15:00 [受付・開場13:00]

会場／聖隷クリストファー大学 1701教室
対象／健康長寿に関心のある方どなたでも
定員／150名

好評連載中
中日新聞
「認知症のはなし」
執筆者

[講師]
遠藤 英俊（えんどう ひでとし） 氏
国立長寿医療研究センター
内科総合診療部長

1982年滋賀医科大学卒業、1987年名古屋大学医学部大学院修了。その後、米国国立老化研究所客員研究員、国立療養所中部病院内科医長などを経て、現在に至る。専門は老年医学、認知症、回想法など。著書に『よくわかる認知症Q&A』（中央法規）など多数。

申込方法

●インターネットの場合　聖隷クリストファー大学ホームページ[http://www.seirei.ac.jp] → 公開講座から
●FAXの場合 …… 聖隷クリストファー大学　保健福祉実践開発研究センター[053-439-1406]まで
（裏面の申し込み用紙をご利用ください）
氏名（ふりがな）・住所・電話番号・FAX番号・PCメールアドレス・職業・申込講座名をお知らせください。

申込締切 12/12(水)
※申込締切日以降に受講票を返信いたしますので、当日お持ちください。

聖隷クリストファー大学 保健福祉実践開発研究センター
〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453 TEL.053-439-1400 FAX.053-439-1406 http://www.seirei.ac.jp
看護学部／社会福祉学部／リハビリテーション学部／助産学専攻科
大学院博士前期課程・博士後期課程　看護学研究科／リハビリテーション科学研究科／社会福祉学研究科

交通のご案内

●バスでお越しの方
JR浜松駅北口バスターミナル15番ポール「聖隷三方原病院経由気賀・三ケ日行」乗車「聖隷三方原病院」下車徒歩約3分。
●お車でお越しの方
聖隷クリストファー大学第1駐車場をご利用ください。

POST CARD-保健福祉実践開発研究センター

－地域貢献研究事業報告会－

地域と歩むラウンジ

2011年度に実施された地域貢献研究事業のポスター報告を行います。1401教室（1号館4階、10:00～15:00）で開催します。

見学は自由ですので、お気軽にお立ち寄り下さい。

またご休憩の場所としても是非、お使い下さい。

お菓子・飲み物もご用意しています♪

◎浜松保健福祉新聞「らしく浜松」最新号を配布します
（2009・2010年度地域貢献研究事業）

Sat. 11/3
聖灯祭＆ホームカミングデー
同日開催

SEIREI CHRISTOPHER UNIVERSITY

聖隷学園

卒業生・修了生の皆様

＊地域貢献研究事業
保健福祉実践開発研究センターが、本学周辺地域の保健医福祉分野に貢献する研究事業を対象として配分する『地域貢献研究事業費』により実施された研究事業。当センターは「保健医療福祉分野に係るすべての人たちとの共同事業・研究」を推進し、共同で課題解決を図ります。

報告課題6件

- 発達障害幼児に適応可能な聴力検査と発達レベルとの関係
- 地域性を踏まえた在宅緩和ケアの訪問看護基準の作成
- コミュニティを基盤とした参加型研究方法（CBPR）を用いたコミュニティ・ニード調査
- 地域在住高齢者を支えるリハビリサポート体制の構築
- 出張型陶芸クラブの創設
- 高次脳機能障害者の就労継続支援事業（ナイトサロン）の効果

- SEIREI CHRISTOPHER UNIVERSITY - SEIREI CHRISTOPHER UNIVERSITY -

聴覚検査のバリアフリーを目指して
リハビリテーション学部
言語聴覚学科
教授（2011年度） 立石恒雄
“自宅で最期を迎えたい”を支える訪問看護
ーケアの道しるべを評価するー
看護学部
教授 酒井昌子
やっぱりここでの暮らしをつづけたい！
ー地域で助け合いながらー
看護学部
講師 仲村秀子
聖隷クリストファー大学は、地域の皆様の健康増進をお手伝いします!!
リハビリテーション学部
理学療法学科
助教 金原一宏
働き続けるためのナイトサロン
ー一杯のcoffeeで支援ー
リハビリテーション学部
作業療法学科
助教 建木 健
土にふれ心にふれる陶芸をお届します
リハビリテーション学部
作業療法学科
助教 鈴木達也
2012年11月3日（土）10：00～15：00
1号館4階1401教室
休憩場所
としてご利用下さい。
お菓子・飲み物も
ご用意してます。
ー地域貢献研究事業報告会ー
地域と歩むラウンジ
11:10～11:30 伊藤ちさヴァイオリンミニコンサート ／ 地域と歩む写真展／「らしく浜松」最新号配布

2012年度　地域貢献事業研究費　報告書

掛川市における保健師の現任教育システムの構築

岩清水伴美*[1)]　鈴木みちえ[2)]　山崎貞子[3)]　中山亜里[3)]
[1)]聖隷クリストファー大学、[2)]順天堂大学保健看護学部、[3)]掛川市保健予防課

Ⅰ．目的

昨今の激動する社会情勢や地域社会の変貌、処遇困難事例の増加などの多様な社会ニーズの多様化により、保健師の専門性は大きく変化してきている。それらに対応するために求められる保健師の能力は、新人、中堅、ベテランに限らず高度なものとなっている。新人は、生活体験の少なさや保健師の基礎教育の見学中心の臨地実習などから住民の生活実態を把握する力が弱く、個人家族、集団、地域への関連づけが難しい等課題となっている。

平成21年7月の保健師助産師看護師法及び看護師等の人材確保の促進に関する法律の改正により、平成22年4月1日から新たに業務に従事する看護職員の臨床研修等が努力義務となった。それに伴い厚生労働省は、「新人看護職員研修ガイドライン～保健師編～」（以下、ガイドライン）を作成した。しかし臨床の場である市町では、日常業務の遂行に精一杯の状況で新人の教育的かかわりが体系的に行われていない現状がある。

臨地実習地である掛川市においては、平成22年度3名、平成23年度2名が新規採用され平成24年度は3名の採用予定である。掛川市は、新人が保健師として社会的責任を認識し基本的態度を習得することが重要であり、基本的な実践能力を獲得できるような研修を体系的に行いたい希望がある。また、新人を指導する立場の中堅保健師は、地域の課題を反映した事業計画立案と実践はできるが、事業評価について行われていない状況である。地域看護過程の評価まで実践できる力をつけるような中堅の人材育成が必要であり、それにより新人への教育的かかわりも充実できるものと考える。これらから、新人への調査・ガイドラインを参考にした新人教育等を実践し、掛川市版教育プログラムを開発する。

Ⅱ．地域貢献事業研究の概要

1）ガイドラインを参考にした「新人教育の実践」を実践する。
- 研究事業「新人保健師が感じる困難と対処方法」を明らかにする。
- 「新人教育の実践」の評価及び調査内容を検討し、『掛川市版教育プログラム』の開発を行う。また、研修が効果的に行われる『職場の体制づくり』を行う。

2）中堅保健師による事業評価実践力向上を目指す。

事業評価研修を実施し、中堅保健師が担当業務の事業評価計画を立て実践しまとめを研究会で報告する。

Ⅲ．ガイドラインを参考にした「新人教育の実践」の実践について

1）　研究事業「新人保健師が感じる困難と対処方法」

(1)方法

平成25年1月、市区町村に就職して1年目、2年目の保健師（以下新任期保健師）10名を対象に、半構造的面接を60分程度実施した。聞き取った内容は、就業内容、保健師として戸惑ったり・困難に感じたことと対処方法、現任研修への希望等である。分析は内容の類似性を考え整理し分類した。倫理的配慮は、聖隷クリストファー大学倫理委員会の審査を受け、研究協力者と同意書を取り交わしてから実施した。

(2)結果

新任期保健師は、平均年齢26.6歳であり、新卒就職者4名、転職者6名（経験平

均年数 4.10 年）であった。

【就職後戸惑ったり困ったりしたこと】個別援助では、『相談の際の知識や技術不足』『発達の遅れなど個別性に応じた判断』『困難事例への対応』『地区組織との役割分担』等があった。事業運営については『事業実施の基本的知識の不足』『異なる助言への対応』『事業実施までの段取り』であった。転職者の中には、看護師等の新人教育は 1 対 1 であり保健師の新人教育との違いに戸惑いを感じている者もいた。

【戸惑ったり困ったことへの対処】『自己の努力』は、相談の際の知識や技術不足への対処は、「先輩やプリセプターに相談」「専門職に質問する」「書籍・文献等を調べる」をあげていた。電話対応や相談を行う際には、「先輩が母親に対応している内容を覚え、模倣した」「対象者に聞いた」であった。「先輩やプリセプターに相談」したと話した新任期保健師は、先輩等が多忙でいつ声をかけたらいいか様子を伺い、緊張しながら相談をしていた。

【新任期保健師の混乱や焦りの時期】就職時点で担当業務の説明を受け何するのか混乱した 4 月、業務見学から実践に移行し能力不足を感じた 5・6 月、自分自身で取り組む業務が重なり混乱をきたした 10 月、困難ケースを受け持ちうまく対応できない 2 月等、混乱や焦りの時期であった。

(3)考察

新任期保健師は、個別援助の知識や技術不足は就業当初全員が感じていたことであるが、さまざまな自己の努力と周囲の支援から経験を積み重ね徐々に解消していた。新任期の現任教育には、新人の自己の努力を引き出し、保健活動実践時のケース見立て等の具体的指導やその推進のための指導体制が必要になる。

2）『掛川市版教育プログラム』の開発について

(1)方法

・ポートフォリオを作成し、自己の目標に沿って 1 年間取り組む。ポートフォリオ確認会、発表会を実施する。
・研修会を行い市の組織、概要、保健師の業務について理解する。研修会を 5 回実施する。
・新人で共同して掛川市（地域）を理解する。地域診断を 4 月～7 月に行い、発表会を実施する。詳細は右の表のとおり。

2012年度　掛川市新人研修プログラム

月　日	内　容	参加者
4月2日（月）	所内オリエンテーション（建物使用の説明、ユニホーム等貸与） プリセプターとの顔合わせ	教育担当 プリセプター
4月10日	プリセプター研修会 「新人研修の内容と支援の仕方について」	課長 教育担当 プリセプター
4月13日（金）	保健予防課オリエンテーション 1　新人研修の概要 （新人支援体制、研修プログラム、ポートフォリオ作成） 1　掛川市の施策理念・目標、保健予防課の役割・機能につて 2　保健予防課の基本方針と計画、意思決定機構について	課長、主幹、係長 教育担当 新人 プリセプター
4月1・2週	掛川市職員研修	新人
4月16日～	新人「業務日誌」　プリセプター「1日5分の定点観測」開始	
6月20日（水）	新人・プリセプター話し合い 「今の思いを話しましょう、ゆっくり聞きましょう」 ポートフォリオ確認	教育担当 プリ、新人
7月27日（金）	掛川市地域診断報告会・・・・*新人さんの力を結集* 「掛川ってこんなところ！　掛川のデータや関係者の話、地区視診から」	課長、主幹、係長 教育担当 プリ、新人
8月6日（月）	健康危機管理の話①・・・・*市役所へ行こう！* 「高齢者虐待」「自殺・DV」対策について	教育担当 新人
9月7日（金）	ポートフォリオ確認会 健康危機管理の話②　「感染症」「子ども虐待」対策について 予算の流れについて（予算書の見方、作成の仕方） 目標の中間評価実施	教育担当 プリ、新人 説明者（○○○）
11月7日（水）	ポートフォリオ確認会 健康危機管理の話③　「防災」について 新人・プリセプター話し合い	教育担当 プリ、新人 説明者（○○○）
2月13日（水）	ポートフォリオ報告会 ・「1年間の歩みを報告し合おう！」（A4判　2枚以内にまとめる） ・プリセプターからの言葉 1年間の評価実施	課長、主幹、係長 教育担当 プリ、新人

(2)結果

新任期保健師がポートフォリオにより目標に沿うよう各自の学びや感性を蓄積することができ、先輩保健師から学びのプロセスと内容が評価された。先輩保健師のポートフォリオはプライベートの目標に沿い実行された。ポートフォリオの発表により先輩の興味関心が分かり、先輩の人柄が伝わり新任期保健師は仕事の相談がしやすい効果があった。

（写真：先輩保健師のポートフォリオ作成風景）

新任期保健師が合同で約３か月かけ市内全域の地域診断を実施した。地域診断を行うことで勤務地に住んでいながら地域の事が把握できていないことに気づき、自分の担当事業の市総合計画における位置づけを把握することができた。さらに、受持地区の特徴を把握したいとの意欲が出てきた。先輩保健師からは、地域診断が視覚化でき新たな発見があったこと、新任期保健師が協働することで仲間意識が芽生えたと好評価があった。

（写真：新任期保健師の地域診断報告の様子）

新任期は職場になじめるか不安があったり何を相談していいかわからなかったりするため、相談ができる関係を構築するためプリセプター制を導入し毎日５分の相談時間（以下、定点観測）を行った。その結果、新任期保健師は先輩保健師に支えられている実感があり細かな質問ができた、先輩が常に側にいなくても定点観測を相談ができる時間として位置づき安心感が得られていた。１年定点観測を実施した結果、６月までは毎日、その後は１週間に１回程度行なわれていた。

家庭訪問や相談業務などの技術習得プログラムは、新任期保健師が持つ事業との調整ができにくく実践できなかった。

(3)考察

ポートフォリオは新任期保健師と先輩保健師ともに目標に沿ったプロセスが把握でき達成感が得られる、内容の評価ができることから効果的である。地域診断報告会も新任期保健師が地域を知る・地域に愛着を持つ効果があり継続実施をする。プリセプター制は職場になじみプリセプターとの関係が良好になるため継続し、定点観測は６月までは毎日行いそれ以降は週１回または必要時に行うことが効果的であると考える。技術習得プログラムは新任期保健師が所属する係に関するものは実施できるが、他係の訪問や相談はできにくい。そのため課内で新任期保健師の技術習得プログラムの様式を作成し回数など明示し実施することが望ましい。（技術習得プログラム様式の１つを次頁に記載）

３）中堅保健師による事業評価実践力向上について

(1)方法

保健師経験 5～10 年程度の保健師が、保健事業「評価計画シート」を活用し事業計画を立案（評価計画を含める）する。評価計画を実践し、成果をまとめ研究会で発表する。

(2)結果

平成 24 年度から、掛川市では親支援プログラムを活用した子育て支援事業を開始することになった。その中の育児力アップ教室の効果を明らかにすることを中堅研修として取り組んだ。調査のプロセスを助言しながら中堅保健師が実践した。（以下、中堅保健師が実践したこと）

① 評価方法として自己記述式調査を用い、調査は教室受講前と 1～3 回目の教室終了後に行った。

② 調査項目は、神戸少年の町版 CSP の効果測定尺度（自己記述式）18 項目に「子どもの年齢や成長発達に合わせ親の要求をすることができるか」、「子どもの問題行動に怒鳴らないで対処できるか」を加えた 20 項目の評定尺度調査、「叱る・誉める比率」、「子育てについての普段の気持ち」、「感想等の自由記述」である。

③ 調査対象は教室受講者 47 名、調査項目すべてについて有効回答なものは 24 名であった。

上記の分析結果を、平成 25 年 2 月静岡県公衆衛生研究会にて「親支援プログラムを活用した育児力アップ教室の取り組みと評価」のテーマで発表した。

(3)考察

中堅保健師は「保健事業の評価は難しい」と思っていたが、事業の企画時点において評価計画を立案し実践すれば事業評価が実践できることが分かった。事業は Plan-Do-See サイクルで実施されるプロセスが分かり、自分だけでなく後輩にも今回の研修内容を伝えていきたいという感想があった。事業評価を行ったことで次年度の育児力アップ教室の回数の増加、内容やＰＲ方法等の見直しが実施されたこと、保健師所属課以外の行政からも効果が認められ事業に対する期待が大となった。このことから各保健師が「評価計画シート」を用いた事業計画を作成し実践することが望ましい。

Ⅳ．まとめ（掛川市版教育プログラムについて）

・現任研修体制としては、新任期にはプリセプター制を導入しプリセプターの相談役も兼ねた研修担当者を置く。研修担当者は分散配置の保健師配属課の了解も得て研修を実施する。

・「掛川市版教育プログラム」は、内容評価とコミュニケーションツールのためのポートフォリオ・定点観測を実施する。オリエンテーションチェック表、技術習得プログラム（家庭訪問・相談業務がんばり表）を作成し進行管理を行う。地域診断研修、保健事業研修も実施する。

・中堅研修として「評価計画シート」を立案し、実践する。

日本看護学教育学会第 23 回学術集会（仙台市）の平成 25 年 8 月 8 日（木）に、テーマ「新任期の行政保健師が感じる困難と対処状況」を発表予定である。

技術習得プログラム（訪問がんばり表）

氏名

＜訪問について＞

訪問したら、日付と先輩氏名を記入してください。独り立ちができるようになってきたら OKのサインを記入してください。

最初と最後はプリセプターと同行します。最終プリセプターが判断します。

＊担当係以外の業務については、体験や様子を知る事が目的

※目標 7月末

新生児	1件	2件	3件	4件	5件	6件	7件	8件	9件	10件
日付	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
先輩氏名・OKサイン										

フォローケース	1件	2件	3件	4件	5件
日付	／	／	／	／	／
先輩氏名・OKサイン					

※目標 9月以降に1～2件程度

＊担当係以外の業務は2件見学

＊担当係以外の業務は2件見学

※目標 3月末まで

成人ケース	1件	2件	3件	4件	5件	6件	7件	8件	9件	10件
日付	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
先輩氏名・OKサイン										

他機関連携ケース	1件	2件	3件	4件	5件
日付	／	／	／	／	／
先輩氏名・OKサイン					

※目標 9月以降に1～2件程度

＊担当係以外の業務は2件見学

出張型陶芸クラブの効果に関する探索的研究

鈴木達也*[1)]、建木健[1)]、佐野実幸[2)]、藤田梢[2)]、縣知子[3)]、佐野佑未子[4)]、太田加枝菜[5)]
[1)]聖隷クリストファー大学、[2)]白梅ケアホーム
[3)]憩いの家だーま、[4)]ワークセンター大きな木、[5)]はるのケアセンター

Ⅰ．はじめに

本研究は 2011 年度の地域貢献事業である「出張陶芸クラブの創設」の継続研究事業として行った。昨年は大学の作業療法学科の設備である陶芸窯を活用し、教員や学生ボランティアが必要な用具を持って施設に赴いた。そこで参加者に作りたいものを作って頂き、作成品を大学の窯を利用して焼き上げ完成品を参加者に届けた。2011 年度は 7 施設で計 20 回、のべ約 260 人を超える参加者に対して陶芸を行った。参加者は初めて陶芸を行ったもので陶芸という作業に個別の意味を見出し、積極的に行う参加者が多くみられた。

今回は昨年度と同様の方法で行う出張陶芸クラブに加え、施設職員や参加者に対してアンケートを行い、出張型陶芸クラブによる効果を探索的に明らかにするものである。

Ⅱ．目的

本研究の目的は施設に赴いて実施する出張陶芸クラブが参加者にどのような効果をもたらすのかを施設職員の視点から明らかにするものである。これにより出張陶芸クラブの効果だけではなく、ボランティアを含めた施設外部者による施設利用者への支援方法の効果・意義、他の手工芸や趣味活動の新たな取り組み方、講義形式や施設職員向けの出張講座とは異なる大学の地域貢献事業に示唆を与えると考える。

Ⅲ．方法

浜松市内の通所または入居施設を対象に研究協力者が該当施設の利用者に説明し参加希望者を募り白梅ケアホーム、憩いの家だーま、はるのケアセンター、ワークセンター大きな木、山の手倶楽部で行った。実施に当たっては研究代表者、研究分担者、研究協力者に加え施設職員や、学生ボランティアの協力を得て行った。実施に際しては素焼きと本焼きの過程があるため「成形」と「色付け」の二度の工程に分け、2 週間から 1 カ月の期間を空けて複数回行った。

アンケートは陶芸活動終了後に実施した。アンケートの項目は「1.活動についてとても良い～とても良くないまでの 5 段階の回答」と、「2.1 の回答の理由」、「3.参加者の発言や感想など印象に残っていること」、「4.参加者の様子で普段と異なるところ」、「5.学生が参加すること」について 5 段階の選択式回答、「6.出張陶芸の継続について」、「7.その他気づいたこと」の 7 項目について回答を得た。アンケートは倫理面に配慮し無記名で行い返信をもって研究参加に同意が得られたものとした。

Ⅳ．結果

陶芸の実施期間は平成 24 年 9 月～平成 25 年 3 月。実施回数は 20 回、延べ 250 人の参加者と述べ 22 名の学生ボランティアに協力を得て実施した。アンケートは陶芸活動終了後に研究協力者に配布し、2 施設の職員計 30 名から回答を得た。

アンケート結果についてはアンケートの項目別にその回答を抜粋して報告する。

1．活動について（５段階の選択式解答）

とても良いが 93.3%（28 名）、良かったが２名（6.7%）といずれの施設でも「良い」との解答が全体を占めていた。

2．１の理由について（自由記述式）

・自分で作品を作る機会がないのでいい経験、記念になると思った。
・陶芸は日常では味わえないのでよい刺激になったと思う。
・普段行うことのない陶芸をやることで、利用者様の生き生きした姿を見れた。
・学生との交流を計りながら楽しく取り組まれていた。
・色はどうしよう、形はどうしようと色々考えながら取り組まれていた。
・誰に、何を作るか利用者様自身が振り返りの場になり、作る喜び、使用する喜び、贈る喜びを得られたと思う。

など、合計 29 の回答を得た。陶芸が施設では非日常的な活動であること、学生との交流が生まれたこと、作成中に楽しそうに積極的に取り組む参加者の様子が理由に挙げられていた。

3．参加者の発言や感想など印象に残っていること（自由記述式）

・「孫のプレゼント」、「ご飯の時に使う」など楽しそうに話されていたこと。
・「米寿の記念になるように」とデザインについて一生懸命考えて発言していた。
・「上手くは出来なかったけど、愛着が湧いたわ」と自室に飾る花瓶を作った利用者が発言されていたこと。
・夫婦で参加されている利用者様が「おそろいの物が出来てうれしい」と話されていた。
・みなさん「楽しかった」と言っていた。

など合計 24 の回答を得た。陶芸活動中、または作品が完成した後の参加者の発言や作品の個々の使用目的などのエピソードが多く職員の印象に残っていた。

4．参加者の様子で普段と異なるところ（自由記述式）

・普段活動をしない人でも目が輝いていた。
・真剣に取り組まれて集中していた。
・帰宅願望の強い人が、実は絵を描いたり作品作りが上手であることを知れた。
・次回を楽しみにしていたところ。
・利用者同士で相談しているところが見られた。
・学生と笑顔で話しているところが印象的だった。

など合計 26 の回答を得た。普段よりも真剣に取り組んでいる様子や、落ち着きのない人が集中して取り組んでいるなど、施設内での日常の姿とは違った面が見れたことが多く語られていた。

5．学生の参加について（5 段階の選択式解答）

とても良いが 90.0%（27 名）、良かったが 3 名（10.0%）と良いと答えた者が多かった。

6. 出張陶芸の継続について

・回答者 30 名全員が今後も継続してほしいと解答した

7. その他（自由記述式）

・作品を地域の文化展に出店した。いまでもサービスステーションに飾っています。
・完成後それぞれのポーズで写真に写っておりとても満足げだった。
・施設には陶芸の施設、設備がないのでまた来てほしい。
・毎年継続してほしい、他の曜日にも来てほしい。
・沢山の学生が来て下さりとても助かった。もっとより大勢の学生に来てほしい。
・作品のサンプルがもっとあると作りやすいと思います。
・利用者と学生がふれあえる機会ができて良かった。
・初めての人でも学生が丁寧に接してくれるので安心して任せることが出来た。

Ⅴ. 考察

今回のアンケートの結果より、出張陶芸、学生ボランティアの参加、活動の継続についてはほぼ全員が前向きな解答をしていた。その理由としては、作業活動としての陶芸の特性、参加者の変化、出張陶芸の実施方法の 3 つに分類できると考えられる。

1. 作業活動としての陶芸の特性

今回の陶芸は粘土から成型し素焼きを行い、各自の自由に絵柄を決めて頂くように行った。一般に成型や色付けなどは自由度が高いと難易度が高く実施時には困難が生じやすい。しかし、今回は見本を見たり、どのような形にするのかを紙に書いたり、研究者や学生ボランティア、施設職員と共同して行うことですべての参加者が自分自身の作品を完成することが出来た。それにより障害や認知面に問題があってもすべての参加者が作品を完成させることが出来、作業中の集中や積極性、満足感や達成感を得ることができ、職員の前向きな回答につながったと考える。

2. 参加者の変化

アンケート結果より参加者のいつもとは違う表情や様子が見られたという解答が多かった。普段は帰宅願望が強かったり、活動に参加しない人が真剣に、また楽しんで陶芸を行っていた。これは陶芸の作業活動としての作業の特性に加え、自分自身で作品を作るということや、どのような作品を作るか、また作った物をどのように使うのか、誰のために作るのかと言った、作業に対する意味を見いだしやすいということが考えられる。参加者の中には米寿の記念、孫へのプレゼント、亡き夫への仏壇に飾る、などその人その人固有の参加する意味が生まれていた。その目的意識の違いが普段とは違った様子を見せることにつながったと考えられる。

3. 出張陶芸の実施方法

今回の陶芸活動は施設内で行われる日常的な活動ではなく、普段行っていない非日常的活動であったこと、陶芸は道具や設備が必要で施設内では行いにくい活動であること、出張という形態で外部から人が来るということ、そして学生ボランティアや職員も一緒に参加することで、参加者と学生との交流が生まれ、一緒に考えながら、協同作業で行えたことが前向きな回答に結び付いたと考えられる。

Ⅵ．まとめ

以上のアンケート結果から出張陶芸の効果について参加者に個々に良い効果を生み出す可能性が示された。高齢者施設には不定期的にボランティアや慰問活動など外部者が活動を提供している。陶芸の様に個人的な意味を生み出しやすい活動や職員、ボランティアスタッフと協同することにより参加者に良い影響をもたらすことが示唆された。今後は出張陶芸の継続方法や実施時方法の改良、参加者個々人の影響について検討していく。

Ⅶ．謝辞

お忙しい中、出張陶芸への参加とアンケートにご協力いただいた施設職員の皆様にお礼申し上げます。

言語聴覚士は療育園の療育においてどのような役割を担えるか

～療育園指導員が在籍児に言語検査を実施する支援を通して～

池田泰子*[1)]、足立さつき[1)]、松本知子[2)]
[1)]聖隷クリストファー大学、[2)]浜松市根洗学園

Ⅰ．目的

浜松市根洗学園の松本園長から指導員に「ことばの発達」に関する研修をしてほしいと保健福祉実践開発研究センターに依頼があったので、指導員の有志を対象として 2011 年度は 3 回研修会を開催した。指導員から子どものことばの発達を促すための軸がないという声が聞かれため、研修会では言語検査「国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査」の概要と言語検査結果に基づく子どもへの支援方法について説明した。その後、松本園長から「学園として指導員にことばの発達を促す軸を持って療育をしてほしい」と言う要望があり、本研究を立案した。

本研究では、指導員が言語検査を実施できるようになり、検査結果を活かして療育プログラムが作成できるようになることを目的とする。指導員は言語発達の軸を持つことで、子どもを療育園に預けている保護者への助言や子どもが所属する保育園・幼稚園の先生に対して適切な助言をすることができるようになり、信頼関係が深まるとともに子どもはいろいろな場面で適切な言語刺激を受けることができ、言語発達がより促されることが期待できる。

Ⅱ．方法

＜第 1 研究＞

根洗学園として全職員にことばの指導についての不安、困り感についてのアンケート調査を実施してもらい、言語聴覚士へのニーズを把握していただき、言語聴覚士の介入方法を検討する。その際に言語検査の習得を希望するかについての意向も合わせて調査する。アンケートの対象は常勤職員 23 名。

＜第 2 研究＞

①第 1 研究で「ぜひ言語検査を習得したい」という方を対象として「国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査（言語検査）」の講義、演習を行う。②その後、自分の担当クラスの中で検査の対象となるお子さんを選定し、言語聴覚士立ち合いのもと言語検査を実施する。③検査結果の算出、指導プログラムの立案については言語聴覚士が個別に対応する。④担当ケースのお子さんに対して言語聴覚士立ち合いのもと個別指導を行う。④言語検査を習得、実施したことは日々の療育にどのような影響があるかについて個別でインタビュー調査を実施する。

Ⅲ．結果

＜第 1 研究＞

アンケート調査の一部を抜粋

1）療育を大変だと感じていますか（図 1）

：約 60％が「とても大変」と感じている。

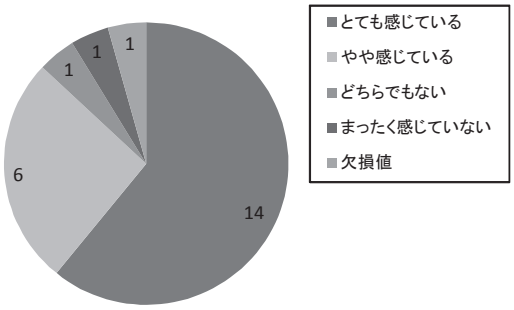


図1「療育は大変だと感じていますか」

2）療育の中でことば・コミュニケーションの指導に不安はありますか（図 2）：約 70%の人が不安と感じている。

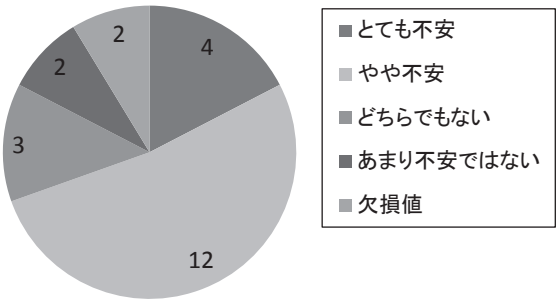


図2「ことば・コミュニケーション指導に不安はありますか」

3）保護者と子どものことばの発達についてやりとりすることに不安はありますか（図 3）：約 70%が不安と感じている。

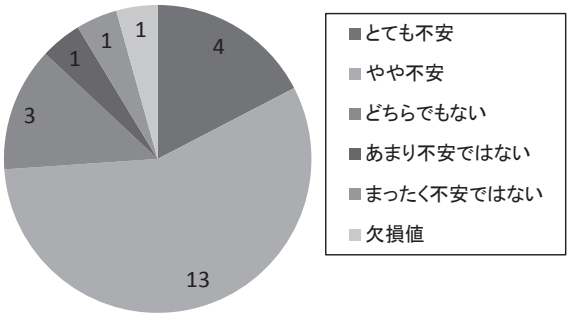


図3「保護者とお子さんのことばについてやりとりする不安」

4）自分なりのことばの発達の「ものさし」は持っていますか（図 4）：約 50%の人が「持っていない」と返答した。

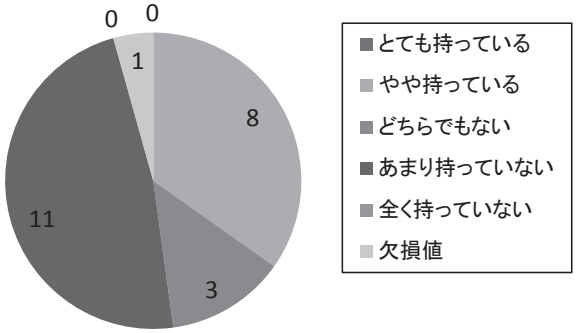


図4「自分なりのことばの発達のものさしを持っていますか」

5）言語・コミュニケーションに関する知識を学びたいですか（図 5）：約 90％の人が「学びたい」と返答した。

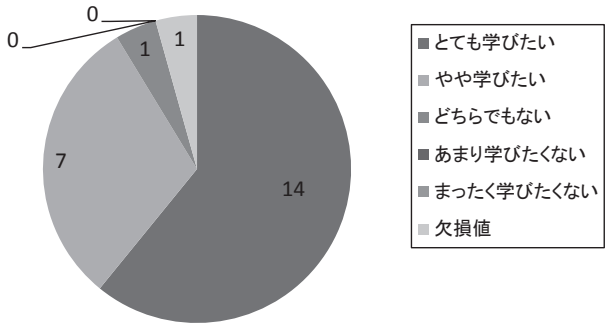


図5「言語・コミュニケーションに関する知識を学びたいですか」

6）言語検査の習得を希望しますか（図 6）：約 80％が希望した。

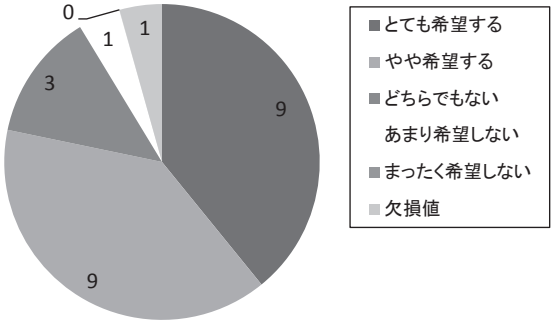


図6「言語検査の習得を希望しますか」

Ⅳ．まとめ

アンケート調査より療育園の指導員は言語・コミュニケーションに関する指導に不安があることが明らかとなった。その 1 つとしては指導の軸となる発達のものさしがないことが挙げられ、言語・コミュニケーションに関する知識を学びたいというニーズが確認された。言語検査の習得を「とても希望する」人は 9 名であった。この結果より言語聴覚士は療育園において間接的に専門性を発揮できる役割があることが明らかとなった。

現在までに約 6 名の指導員を対象に言語検査の習得に向けての研修会を 4 回開催した。現在、協力児を選定しているところであり、その後、言語検査を実施する予定である。

Ⅴ．学会発表、論文発表の状況

2014 年度のリハビリテーション科学ジャーナルに投稿予定。

就労支援事業としての水耕栽培の導入および効果に関する調査研究

大町かおり*[1)]、岩井万祐子[2)]、原 和子[3)]、堀部恭代[3)]
[1)] 聖隷クリストファー大学、[2)] 株式会社ホトアグリ、[3)] 愛知医療学院短期大学

Ⅰ．事業内容と目的

私達は平成19年に、静岡市産学交流センター産学共同研究委託事業の研究、「作業療法としての園芸の効果の検証とレイズドベッドの開発」研究をおこなった。その成果を発表する中で（株）ホトアグリより、知的障害者の水耕栽培について相談が寄せられた。水耕栽培はクライエントに合わせて環境設定がしやすく、安全性においても優れているなどの長所があり、リハビリテーション医療の立場から今回の研究着手に至った。

目的は、就労支援としての水耕栽培の可能性と適応、効果についてリハビリ医療の立場から検討することである。期待される成果は、知的障がい者を始めとする障害者に、水耕栽培が各個人に合わせた環境調整をしやすい点、作業選択の可能性を拡げる点で有利であり、就労支援に寄与できることである。

また、知的障がい者を始めとする障害者を対象とする前に、健常者若年者に対し、介入となる園芸療法の動作分析および心理的効果をコントロールとして測定し検討する。

Ⅱ．取り組みの現状と問題点

健常者若年者に対し、介入となる園芸療法の動作分析および心理的効果をコントロールとして測定し検討することは行うことができた。

しかし、上記の事業内容と目的等、研究計画を立てるにあたり、知的障がい者の施設（浜松市）および高齢者介護福祉施設（袋井市）に事前に了解を得ていたが、介入の説明を再度行ったところ、両者ともに断られ、新たに調査施設を開拓することとなった。愛知県の高齢者介護保健施設の協力が得られることとなったが、10月のオープン予定が12月にずれ込み、入居者数の関係からも対象者が少なく、数名にインタビューを行うのみで今回は終了することとなった。

実際に行うことができたのは以下の項目である。

■健常者若年者に対して
・身体的影響：作業台の高さおよび奥行の設定がリーチ動作における上肢・体幹の関節角度と重心移動に与える影響について
・心理的影響：植物を用いた作業介入がその後の気分に与える影響（スポンジによる作業との比較）
■園芸療法を行った高齢者介護保健施設の入所者の方（3名）に対して
・介入後インタビュー
■高齢者介護保健施設の理学療法士および作業療法士に対して
・今後の展開に対するインタビュー
■クライエント中心の適材適所について園芸作業の分析から就労支援計画を立案する
・今回、実践までは至らなかったが、対象となる方の障害度と作業とのマッチングを判定する指標の試作

以下に、行うことのできた項目ごとに方法と結果を述べる。

Ⅲ．方法・結果・考察

■健常若年者に対して

＜身体的影響＞

作業台の高さおよび奥行の設定がリーチ動作における上肢・体幹の関節角度と重心移動に与える影響について

⇒本研究では、園芸台の高さと奥行きの違いが、リーチ動作における肩・肘関節、体幹の角度と重心移動に与える影響について検討した。健常成人女性 12 名を対象とし、台の高さを 2 パターン、奥行きを 3 パターン設定し、各高さでの最大リーチ距離を合わせた全 8 試行を測定した。結果、台の奥行きによって肩関節と体幹の動かし方の戦略に違いがあり、奥行きが短い距離では肩・肘関節の屈曲によりリーチ動作を行うが、最大リーチ距離の 50%程度を超えると体幹の前屈を導入し、肩関節もさらに屈曲させることでリーチ動作を行うことが示された。

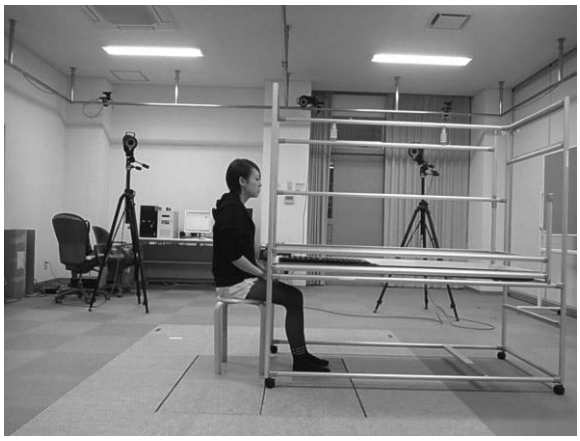


写真 1・2：測定の様子

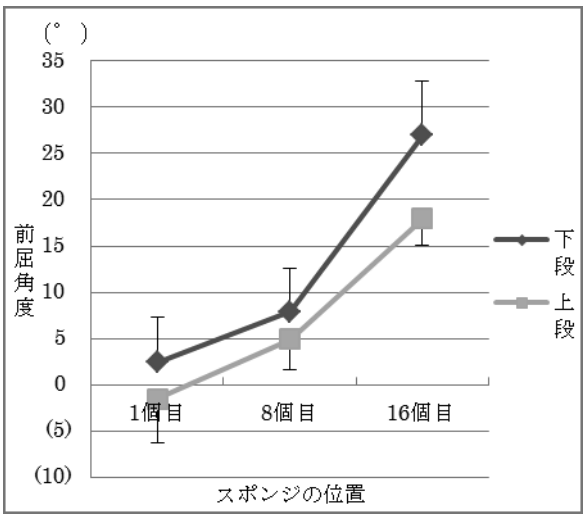


図 1　体幹の前屈角度

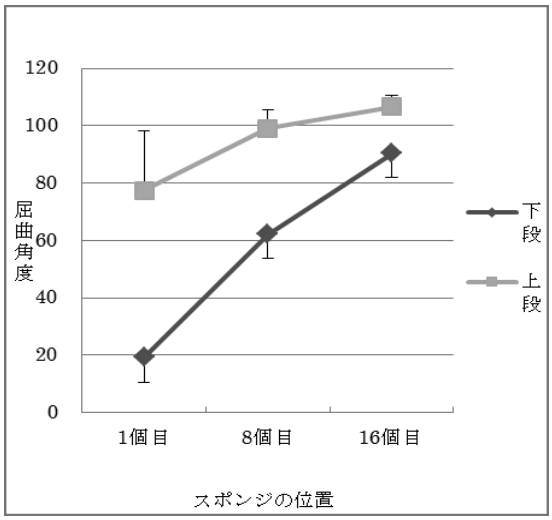


図 2　肩関節の屈曲角度

■健常若年者に対して

＜心理的影響＞

植物を用いた作業介入がその後の気分に与える影響について

（スポンジによる作業との比較）

⇒本研究では、園芸台に設定したスポンジおよび植物をつまみ、かごに入れる作業介入が、その後の気分に与える影響について検討した。健常成人男性および女性各 12 名ずつを対象とし、前述の作業介入は 10 分間の行い、時間内の作業量を記録した。その前後に、また、主観的な気分の尺度として POMS を自記式で行い、客観的なストレス尺度として唾液アミラーゼを測定した。男女とも、スポンジと植物の作業介入前後での唾液アミラーゼに有意な差は認められなかったが、男性においては気分の尺度について植物での作業の方が有意に改善した。

写真 1：測定の様子

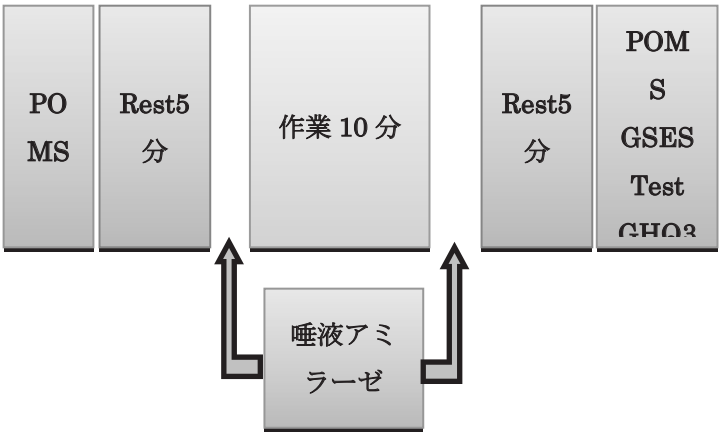


図 1：測定手順

表1：POMS短縮版の各尺度の意味

T-A (Tension - Anxiety)：緊張及び不安感
D (Depression - Dejection)：抑うつ及び落ち込み
A-H (Anger - Hostility)：怒り及び敵意
V (Vigor)：活気
F (Fatigue)：疲労感、意欲の低下
C (Confusion)：混乱

表 2：POMS の結果

	条件	男性	女性
POMS-T-A	スポンジ変化	-2.3±7.2	-3.8±6.0
	植物変化	-8.4±7.7	-4.4±6.4
POMS-D	スポンジ変化	-2.6±7.4	0.2±7.2
	植物変化	-5.1±7.2	-3.8±6.0
POMSA-H	スポンジ変化	0.8±8.8	-2.6±4.9
	植物変化	-4.2±3.8	-2.3±5.9
POMS-V	スポンジ変化	-2.8±10.2	-0.7±4.9
	植物変化	-1.5±6.1	-0.4±7.2
POMS-F	スポンジ変化	2.9±6.5	-1.6±7.8
	植物変化	-3.9±7.6	-0.4±5.6
POMS-C	スポンジ変化	-0.8±8.5	-3.0±7.9
	植物変化	-6.5±10.4	-5.3±8.9

■園芸療法を行った高齢者介護保健施設の入所者の方（3名）に対して
＜介入後インタビュー＞

Nさん:はじめは作業のひとつとして参加していた。(先ほど収穫したばかりの野菜を)できればジュースにしてみたい。

Iさん:もともと園芸が好き。花や木も好き。もう少ししっかりとした畑のようなところで作ることができたらいいけれど、身体の具合を考えると車いすでの生活になるので、(それでもできる）このようなことは楽しい。

Kさん:以前、プチトマトやカイワレ大根を家庭菜園で作っていたので、やってみませんかと言われて行っている。でも今は、一進一退の自分の身体の症状のほうが気になる。

■高齢者介護保健施設の理学療法士および作業療法士に対して
＜今後の展開に対するインタビュー＞

PT：今後は、車いすでも行える水耕栽培だけでなく、小さな畑で野菜などを育てられるように少しずつ規模を大きくしていく予定である。
実際の運営はOTが行っている。

OT：日々育っていく植物を毎日楽しみにしている入所者の方もいる。今後はハーブなどを育てて、少しずつ出荷できるようにしていきたい。

■クライエント中心の適材適所について園芸作業の分析から就労支援計画を立案する
＜対象となる方の障害度と作業とのマッチングを判定する指標の試作＞

・種まき、移植、収穫、それまでの水やりや雑草の削除や間引きなど、対象となる方の障害度と作業とのマッチングを判定する必要があり、以下の評価表を作成した。
「リハビリ農園作業評価表」「パラチェック：Parachech Geriatric Rating Scale;PGS（日本語版)」など。

Ⅳ．今後の課題

・今回の研究で、介入としての水耕栽培について、健常者に対する身体的・心理的の影響を知ることができた。
・新たに介入可能となった高齢者介護保健施設との関係性を深めつつ、試作した作業評価表等の実施を行い、対象者主体でありながら、適材適所の配置によって最終的に就労へつながる水耕栽培を行えるよう、今後も研究を続けていきたい。

地域在住高齢者を支えるリハビリサポート体制の構築

金原一宏*[1,2]、大城昌平[1,2]、根地嶋誠[1,2]、大杉紘徳[3]、合田明生[2]、寺田和弘[4]
[1]聖隷クリストファー大学、[2]聖隷クリストファー大学大学院、[3]京都橘大学、[4]寺田痛みのクリニック

Ⅰ．事業の概要

我が国は、超高齢社会に至っている。ここ10年間の国民生活基礎調査における痛みの有訴率は、男女ともに腰痛、肩こりが1、2位を占め、その人数は年々増加している。これは、我が国の慢性疼痛治療が、奏効していないためである。痛みは、誰もが体験する感覚であり、感情である。慢性疼痛は、近年脳イメージング研究の進歩により、中枢神経感作による神経の可塑的変化が原因とされる。この慢性疼痛は、患者のADL及びQOL低下を招く。さらに治療が奏効しないためドクターショピングの問題や就労問題、介護問題などに繋がり、現在、国家財政に問題が及ぶ状況である。高齢者には、加齢による身体機能の低下から痛みを持つ患者が多数いる。

地域高齢者が快適に暮らすには、疼痛の知識を学び、自宅や介護保険サービスの利用時に周囲の方と共に、運動に取り組むことで、慢性疼痛を減少させる必要がある。現在の状況を知る限り、早急な対応が必要である。我々は、地域在住の高齢者がすこやかに生活するために痛みを含めた健康講座を開催した。この講座は、地域住民や地域在住高齢者の健康寿命の延長を支えていく上で重要である。各分野に精通した医療従事者である大学院生が講師を務めることで地域在住高齢者との交流を図ることができ、本大学及び大学院が地域に根付いていくことに繋がる。講座を通じて、最新の脳や身体機能（身体的・心理的健康)、そして痛みの話題、さらに研究への参加が促され、地域住民は脳と身体機能を自ら知ることで、健康への意識が増すと考えられる。

我々はこの講座の役割は、日頃の研究を地域住民へ還元するとともに、地域住民が気軽に参加できる講座を地域内で開催することで健康寿命の延長を支えると考えている。

Ⅱ．目 的

地域在住高齢者の健康生活を支えるシステムを構築するため、本講座の状況を踏まえ現状のリハビリサポート体制を把握する。

Ⅲ．実施方法

方法は、

①研究分担者と相談し、リハビリサポートを開催する日程を決定した。

②講座内容は、健康を脳と身体機能に着目し、痛みの医学と生涯人間発達の視点から捉え、講演に実演を含め行うよう決定した。

③リハビリサポートの広告を作成した（図1)。

④浜松市北区と中区の一部にリハビリサポートの広告を配り（13,000世帯へ新聞折り込みを1回配付した。)、参加者を募った。

⑤聖隷クリストファー大学の教室を使用してリハビリサポート（実習・講演等を中心に実施した。）を開催した（図2)。

⑥より良いサポートのために講義内容の柱を、身体機能と脳機能（認知）として、講座を実施した。
⑦アンケートにより、受講生のトレーニングに関する意欲や講座内容の反応、さらに地域への貢献度を調査した。
⑧アンケートを利用して地域の方々が必要としている情報内容を把握することに務め、この活動をより充実したものにするため情報収集をした。

Ⅳ．倫理的配慮

研究代表者および個人情報取扱者は、対象者ごとに整理番号を付与して、匿名化データを作成し、厳重に保管･管理する。この活動から得られた結果の公表については、個人の名前など一切わからないようにし、プライバシーが完全に守られるように配慮した。

Ⅴ．成果（地域との連携の成果）

今回の成果であるアンケート結果を以下に示す。
参加者数：第1回（10月6日）：65名、第2回（12月1日）：62名
アンケート回収率：72%（問 1～8 は、第 1 回実施、問 9～13 は、第 2 回実施。）
以下アンケート内容（図 3）

問 1. あなたの年齢を教えてください。
平均年齢：67 歳（35 歳～89 歳）
問 2. あなたの性別を教えてください。
：男性 15 名、女性 35 名
問 3.過去 6 ヶ月間で転んだことはありますか？
：ある：28%　ない：72%
問 4. 「痛みの基礎と最新治療」を受講して理解が深まりましたか？
かなり理解できた：28%　・　理解できた：59%　・　どちらともいえない：7%
あまり理解できなかった：7%　・　全く理解できなかった：0%
問 5. 「痛みの理学療法」を受講して理解が深まりましたか？
かなり理解できた：25%　・　理解できた：61%　・　どちらともいえない：9%
あまり理解できなかった：2%　・　全く理解できなかった：2%
問 6.今回の講義を受け今後の生活で自主訓練を実施しようと思いますか？
必ず実施する：18%　・　実施する：77%　・　どちらともいえない：5%
実施しない：0%　・　絶対に実施しない：0%
問 7. あなたの今の痛みについて教えてください？（第 1 回 10 月 6 日実施）
痛みがある：70%　　痛みがない：30%
問 8.痛みがあると回答した方にお聞きします。本日の講座受講前後の痛みの強度と痛みの不安を下記の数字に〇を付けてください。
痛み強度の改善した人：40%　　痛みの不安が改善した人：55%
問 9.前回の講義を受け、自主訓練を行いましたか？
実施した：38%、実施しない：48%
問 10. 「生涯人間発達と健康」を受講して理解が深まりましたか？
かなり理解できた： 8%　・　理解できた：77%　・　どちらともいえない：5%
あまり理解できなかった：2%　・　全く理解できなかった：0%
問 11. 「筋力トレーニング」を受講して理解が深まりましたか？
かなり理解できた：14%　・　理解できた：77%　・　どちらともいえない：0%
あまり理解できなかった：0%　・　全く理解できなかった：0%

問 12. 今回の講義を受け今後の生活で自主訓練を実施しようと思いますか？

必ず実施する：11%　・　実施する：74%　・　どちらともいえない：9%

実施しない：0%　・　絶対に実施しない：0%

問 13. あなたの今の痛みについて教えてください？（第 2 回 12 月 1 日実施）

痛みがある：51%　　痛みがない：49%

図 1　リハビリサポートの広告

図 2　すこやかリハサポートの講座の様子

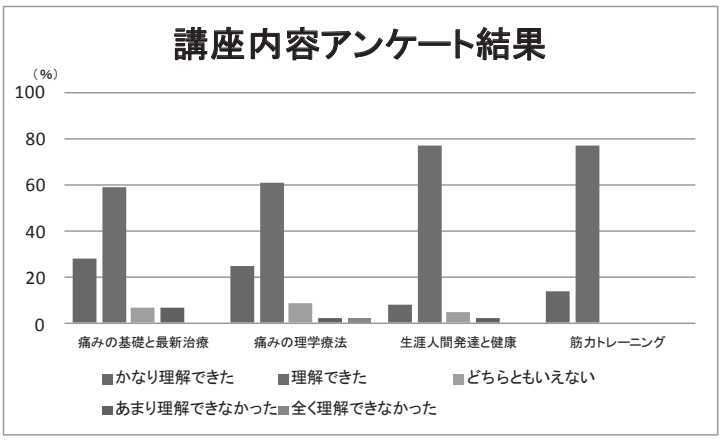


図 3　講座内容アンケート結果

自由記入欄

・事前の電話連絡の対応が良かった。当日の学生さんの案内が良かった。

・痛みに対する考え方が少し変わりました。痛みが出た時に「まぁまぁ」としないで、病院受診をする事にします。ありがとうございました。

・先股脱から、両側変股で 4 年ぐらいリハビリしています。まだ関節の隙間は保たれているようですが､最近は腰部脊柱管の狭窄も始まってきたようで､ゆううつな感じでした。笑顔を大事にしたいと思います。

・始めて参加させていただきました。日常生活におけるワンポイント、大変参考になりました。ありがとうございました。

・痛みのとらえ方、感情が左右することなど、勉強になりました。筋力強化するには持続させることが、大切とはわかるのですが、なかなか・・・。まずは 1 週間を目指してみようと思いました。笑顔を大切にして、明るくしたいと思いました。

・痛いと、どうしても動かないでいます。でも動く事の大切さが、良く分かりました。

努力して動きます。本日はありがとうございました。
・この１年で痛みを感じなかったのは７日間の東北旅行だけでした。「笑い」大切ですね～。ありがとうございました。通院とストレッチだけは毎日続けていますが・・・。なかなかよくはならずでした。気持ちを入れかえていくことも取り入れていきます。
・今回の講義で教えて頂いた事を、自分でも実践していきたいと思います。また、他の方にもお伝えしたいと思います。ありがとうございました。
・寺田痛みのクリニック受診し、寺田先生に原因を教えていただきさらに本日の受講で、金原先生、よく理解できました。
・わかりやすく指導していただき、毎回続けていこうと思います。本当にありがとうございました。今まで、痛いときは痛いと思ってきたけど、脳に関係があると分かり少しホットしました。これは、脳が痛いんだと心に言い聞かせています。今日は本当に良かったです。必ず実践します。
・自分ひとりでは、できないことも、先生に指導をしていただき、自ら動かす。体が丈夫になりたいので今後もよろしく。時間を作って教えてください。
・筋力トレーニング続けてやっていこうと思います。運動は意識しないとなかなかやれませんが手軽なものから取り入れてゆけばやれそうだと思いました。
・年だからとあきらめないで前向きに考えて取り組んでいきたいと思った。運動を継続していくのは難しいけれど、時間を見つけて続けていきたい。
・股関節を強くする。立ち上がりテスト、知らないことが明らかになりとても役にたちました。

アンケートから講座受講後、受講生は痛みを持つ約半数の方で痛み強度と不安が減少した。第１回目の講座後、自主訓練を実施できた人は、38％であった。第１、２回の自主訓練へのモチベーションは、同様の傾向があった。第２回の講座後の痛みは、痛みがあると答えた人は、減少していた。これは、自主訓練をした人の痛みが減少した可能性もあると考えられた。今回、受講生のトレーニングに対する意欲が向上した。各講座の満足感も高い結果であると推察した。自由記載は、講座開催への感謝の思いや、痛みの正しい知識を学ぶことで痛みが減少したという感想がみられた。以上より、今回の講座が地域在住の方々に役立てられ、本学が地域貢献に至っていると推察した。ゆえに今後も活動を継続する必要性を感じた。

今回の健康講座では、痛みを中心に脳と身体のトレーニングが健康寿命に関連し、つながることを伝えた。新たな慢性疼痛の概念は、まだまだ、住民に周知されていない。今後も、痛み講座の必要性を感じた。すこやかな生活には、痛みの問題が大きく関連する。このようなに健康に関する様々な企画を、地域の方々に受講していただくことで、健康寿命延長がする可能性がある。本講座の受講生は、高齢者で痛みを持つ方が多く参加された。受講生は、痛みの知識を学ぶことで、日常生活における身体や脳の不安体験を減少できた可能性がある。このような方々に、より健康な生活を送っていただくため、我々は、健康講座を開催していく意義があると考えている。ゆえに今後も、すこやかリハサポート健康講座を継続することで、この地域住民の方々のリハビリサポート体制を整えて行く。

Ⅵ．発表計画等

保健福祉実践開発研究センターが企画する報告会で発表する。

高齢者の居場所づくりによる街中にぎわい計画

ー世代を超えた絆づくりー

建木健※1)、建木良子2)、藤田さより1)、鈴木達也1)、堀米美紀3)、鈴木基生4)
1) 聖隷クリストファー大学、2) ＮＰＯ法人えんしゅう生活支援 net、
3) ＮＰＯ法人あくしす、4) 田町パークビル株式会社

Ⅰ．背 景

しんきん経済研究所の調査結果、顧客は浜松市駅周辺の店舗で過去 2 年間に買い物をしなかった人の割合が 4 割を超えている。近年は大型ショッピングモールへと人が流れる傾向にあり、駅周辺における集客力の低下及び空洞化現象は市全体の経済の流れを低迷させる一因ともなっている。また、浜松市中央地区における高齢化率は 30.7%で、さらに地域によっては 60%を超えるところもあり、浜松市全域の高齢化率である 22.7%を上回るなど都心部の高齢化率は高い傾向にある。近年、介護度の要支援者が増加傾向にあり、このことは介護度の良化を示しているが、現実はこれまで利用していたサービスが使えなくなるなどの問題も含んでいる。このような中、介護保険の分野では利用者の大幅な増加や、ニーズの多様化から、希望に見合ったサービスを受けることが難しく参加の機会がなく社会に「居場所」が見つけられないまま閉じこもりとなっている高齢者や障害者の存在は否定できない。前述の経済の低迷に加え、地域福祉の事柄を違った角度で考えれば障害者や高齢者の既存の送迎付き通所サービスだけでは人の動きは単一的でそれ以上の経済効果は期待できない。そこで商店街において高齢者の居場所づくりを行い地域の活性化を目的に本事業を実施する。

Ⅱ．方 法

浜松市商店街において空き店舗（浜松市田町商店街）を活用し、要支援者及び特定高齢者を中心に「居場所」を提供する。そしてその「居場所」に集まる若者及び団塊世代を含めて世代間交流のスペースとする。

居場所内での活動内容は、自由なオープンスタイルとし滞在時間及び利用開始時間等は問わない、自由な時間に利用できるようにする。この世代間交流を通して、高齢者の役割づくりと社会参加への意義を体験していただく、また若者にとっては、この場を利用して、高齢者理解と社会参加への意義を理解する。また、不定期にイベント作業（健康体操、陶芸や革細工などニーズに合わせた活動を提供）を開催する。実施者は、常駐スタッフ（団塊世代）、学生ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ及び作業療法士で行う。参加者の確保においては、地域包括支援センター及び公民館、折込チラシにて広報を行う。「居場所」の開催時間は週 2 回で 10:00～15:00 までとして 6 か月間実施予定とする。参加延べ人数は、1 日 5 名程度とし、事業終了後の参加者述べ人数見込み数は 240 名である。効果測定として参加延べ人数とした。

常設型「居場所」は、″まちの縁側″や″コミュニティーカフェ″などとも呼ばれ、近年全国的に広がっている。東日本大震災は、地域の絆づくりや支え合いの大切さを再認識する契機となったが、常設型「居場所」の取組は、

介護予防・認知症予防、引きこもり・孤独死予防、子育て支援・障がい者支援など、多くの社会的な効果が期待されている。一昨年には静岡県の委託事業として常設型「居場所」づくりが行われるなど関心が高くその意義に期待されるところである。今後、福祉において「居場所」がキーワードとなり、世代を超えたコミュニケーションの場として若者から高齢者までが集える空間が地域福祉や経済的視点においても重要な要となる。商店街を活用し、福祉とのコラボレーションという発想で新たな人の流れを作り、既存の資源を利用してこれからの街づくりの構想が広がっていくことが期待されている。

Ⅲ．経過及び結果

2012 年 6 月 11 日より 2013 年 2 月 18 日まで、カギヤビル 2 階（9 月よりたけし文化センターインフォラウンジに移転）にて計 61 回実施し老若男女を問わず 295 名（1 日平均 2.42 名）がこの居場所（以下フクロ工房）を利用した。運営に当たり、事業計画とコンセプトのプレゼンテーションを開催し、浜松市田町繁栄会、NPO 法人クリエイティブサポートレッツ、NPO 法人えんしゅう生活支援 net、聖隷クリストファー大学学生及び教員、静岡医療科学専門学校学生及び教員、浜松大学学生及び教員より賛同を得ることができ、フクロ工房を開催した。

実施に当たっては、参加者（特に高齢者）の伸び悩みが課題となった。その為、参加者へのインタビューを実施し、以下の課題が明確となった。①その場にいてもやることがない②広報が伝わるべきところに伝わっていない③カギヤハウスの場所がわかりにくい④イベントの情報もネット上であることを中間の課題として確認していた。その後、9 月より常設場所を移転することとなり、NPO 法人クリエイティブサポートレッツの管理する「たけし文化センターインフォラウンジ」内に移転となった。

2012 年度卒業研究の課題として堀米美紀は、「街中の居場所づくりにおける現状と課題―フィールドワークを通して―」というテーマでこの居場所の運営スタッフとしてフィールドワークを通して人が集まらない理由を分析した。期間は平成 24 年 9 月 3 日から平成 24 年 10 月 17 日の間、フクロ工房が開かれる毎週月曜日と水曜日の週 2 日、計 12 回のフィールドワークを実施した。主なインタビュー内容を利用目的とし、どのような事を求めているかを記録した。その結果、利用者はほぼ固定しており、利用目的としては「仕事などを行うため」、「スタッフとの会話の為」、「時間潰し」、「企画や施設の紹介」などを目的として訪れている方が多かった。（表 1）また利用者はフクロ工房と何かしらの関係がある人が多く、地域の高齢者層が訪れることは少なかった。また利用者が訪れたとしても直ぐに帰ってしまっている現状から、何が原因となり本来の機能を果たすことが出来ていないのかを追求した。

その結果､利用し難い理由としてインタビューからは、「①ガラス張りの反射によって室内の様子が伺えず不安」、「②中に入っても見学できるものなどが無く、目的無く入って行けない」、「③暗く、雰囲気が閉鎖的」、「④既に利用している人たちでグループが出来上がっているように感じ、居づらさを感じる」、「⑤中に入っても何をやっていいかが分からない」、「⑥何をやっているところなのか分からない」といった事が挙げられた。

カギヤハウス(６月～８月)

Ⅳ．考 察

本事業において、高齢者の居場所づくりを街中で実施したが、さまざまな要因から高齢者が集える場となり得なかった。

山崎によると、高齢者が生活の中で充実感を感じる時として最も多い意見が「趣味」次いで「雑談」という結果が出ており、また地域のコミュニティーの場の特性として、①中の様子が伺える開けた環境であること、②多数の友人・知人が訪れる場であること、③いつでも趣味活動など何かしらの作業が行なえ、尚且つ参加性の自由があること、以上３つの点が述べられている。これらの条件と比較しても、居場所となりうるための趣味といったような高齢者が共通して楽しめる作業が存在しなかったことが大きな要因であったと考えられる。

また澤らによると、作業におけるコミュニケーションは、通常の言語によるコミュニケーションに加えて、作業活動（行為・動作）やモノ（材料・道具・作品）を媒介にすることが多く、コミュニケーションに非言語的な要素の占める割合が大きいという特徴がある。こうした「モノの媒介」のコミュニケーションは、言語によるコミュニケーションと比較すると、①相互に適度な心理的距離を保ちやすく、②作業がもたらす共有体験が基盤となり、③具体的・現実的な関わりがもちやすい、といった利点があると述べている。つまり、何かしらの作業を媒介にすることによって人と人との交友関係を円滑にする可能性が伺える。

文
老若「知恵袋」を共有
中区・万年橋パークビル 交流拠点オープン

中日新聞 2012.9.6 掲載

Ⅴ．今後の展望

本研究を持って高齢者の居場所づくりは終了し多くの課題を残すと共に新たな知見を得る結果となった。また９か月間という短い期間であったが、街中の抱える課題や高齢者の在り方を改めて考えさせられた。

現在は、本事業をもとにテーマ性を持った集いの場を設ける予定であり、住民主導型で企画が上がっている段階であり、「昭和日常博物館 at ゆりの木通り」(仮)という企画を構想中である。

表１　利用者の利用時間及び目的

	頻度	性別	年齢	職業	時間帯	目的
Aさん	4回	男性	60代	芸術家	13時～14時	私用のPCが無く、PC利用の為にフクロ工房が開かれる以前からたけし文化センターを利用していた。
Bさん	5回	男性	20代	大学生	13時～15時	インフォラウンジスタッフの方とルームシェアをしており、その紹介によりフクロ工房を利用。主にPCでの仕事をフクロ工房では行っている
Cさん	4回	女性	10代	塾生（浪人生）	14時～15時	近所の塾生で、利用当初はインフォラウンジのスタッフに用事があり訪れた。その後紹介で、授業の無い暇な時間に息抜きとして利用。
Dさん	4回	女性	10代	塾生（浪人生）	14時～15時	当初はCさんの付き添いであったが、２回目からはCさんと同じく授業の無い暇な時間にCさんと共に息抜きとして利用。
Eさん	2回	男性	40代	社会人	13時～14時	フクロ工房スタッフから宣伝を受け、リハビリや映画の帰りに利用。主にスタッフと会話を目的とする。
Fさん	1回	女性	10代	塾生（浪人生）	14時～15時	C、Dさんの友人で、紹介を受け利用。同じく授業の無い暇な時間にCさんと共に息抜きとして利用。
Gさん	1回	女性	60代	不明	14時頃	看板や新聞を見て、友人と共に利用しようとしていたが、友人が用事の為利用は断念。一人だと利用しづらいので、また来ますとの事であった。
Hさん	1回	女性	60代	不明	13時半頃	新聞でフクロ工房の記事を見て、どんなものか気になって様子を見に立ち寄ってみた。
Iさん	1回	男性	50代	社会人	13時半～14時	たけし文化センター管理人の紹介により利用。福祉の家族会に入っており、主に施設の話をしに来ていた。
Jさん	1回	女性	40代	社会人	12時半～13時半	たけし文化センター管理人の紹介により利用。福祉関係の仕事をしている為、主に施設の話をしに来ていた。
Kさん	1回	男性	40代	社会人	11時半～12時	たけし文化センター管理人の紹介により利用。施設団体を運営しており、外出介助アルバイトの募集の話などをしに来ていた。
Lさん	1回	男性	60代	不明	13時～14時	たけし文化センター管理人の紹介。学生ボランティアを募集しており、その宣伝も兼ねて話をしに訪れた。
Mさん（団体）	1回	団体	20～40代	社会人	13時半～14時	フクロ工房スタッフから宣伝を受け、映画の帰りに利用。主にスタッフと会話を目的とする。
Nさん	1回	男性	60代	不明	12時頃	街中でボランティア企画をしに来ており、道を聞くためにフクロ工房へ立ち寄った。その後時間があったため小一時間程利用。
Oさん	1回	女性	50代	不明	14時頃	インフォラウンジにあるチラシを求めて立ち寄ったが、チラシを貰いに来ただけであり利用はせず。
Pさん	1回	男性	30代	社会人	14時～14時15分	仕事の打ち合わせのためにAさんとフクロ工房で待ち合わせをしており利用。

2012 年度保健福祉実践開発研究センター運営会議
委員一覧（所属、職位は 2012 年度）

センター長	小島　千枝子	リハビリテーション学部言語聴覚学科 教授
副センター長	大場　義貴	社会福祉学部社会福祉学科 准教授
委員	鈴木　知代	看護学部 教授
委員	梅本　充子	看護学部 准教授
委員	店村　眞知子	社会福祉学部こども教育福祉学科 准教授
委員	矢倉　千昭	リハビリテーション学部理学療法学科 准教授

2013 年度保健福祉実践開発研究センター運営会議
委員一覧

センター長	小島　千枝子	リハビリテーション学部言語聴覚学科 教授
副センター長	大場　義貴	社会福祉学部社会福祉学科 准教授
委員	梅本　充子	看護学部 准教授
委員	入江　晶子	看護学部 准教授
委員	店村　眞知子	社会福祉学部こども教育福祉学科 准教授
委員	矢倉　千昭	リハビリテーション学部理学療法学科 准教授

保健福祉実践開発研究センター年報
第 4 号（2012）

2013 年 11 月 1 日発行

編集　聖隷クリストファー大学　保健福祉実践開発研究センター
発行　聖隷クリストファー大学
〒433-8558　静岡県浜松市北区三方原町 3453
TEL　053-439-1400
FAX　053-439-1406
印刷　株式会社アプライズ

地域と歩む

聖隷クリストファー大学
保健福祉実践開発研究センター
Community-Based Practice and Research Center for Health and Welfare